









鐵

幹

子

凡

鐵  
幹  
子

41

鐵幹子自序

われの詩集はわれの寫眞帖なり、みづから見て打笑まるゝ所なり、覽てがたき所なり、なつかしき所なり。

諸友、わがために明治三十年以後の舊作を輯めて鐵幹子と題し、ここに刻に上して世に公にす。既に寫眞帖なり、雅氣大いに盡らす、狂態微厭ふべきものあるは、當にその所なり。大方識者の嘲笑は、作者ぞ甘んじて之を受けむ。

國人の早熟なる、年三十四にして氣儘か

*Itsu Kamizya*

精食へざるへなし、方今の文壇、何ぞ若年寄の多きや。われ甥に憶へらく、七十八十にして一篇の大作を完成し得ば、以て自ら負ふ所に酬ゆるに足らん。我國韻文の創始期にありて、疵瑕なきの作を誇るは、寧ろ滑稽に屬せずや。われハ畸形兒と若年寄とを憐むの理由を知らざるなり。

岡山常磐木旅館に於て

# 目次

○	みやすどころ	(新体詩)	.....	一				
○	暮	鐘	(新体詩)	.....	五			
○	廻	燈	籠	(新体詩)	.....	八		
○	舞	妓	君	子	(新体詩)	.....	一〇	
○	落	花	吹	面	(新体詩)	.....	一五	
○	人	を	戀	ふる	歌	(新体詩)	.....	一九
○	劍	銘	(新体詩)	.....	二六			
○	愚	庵	十	二	勝	(短歌)	.....	二七
○	葛	紅	葉	(短歌)	.....	三二		
○	江	上	曲	(新体詩)	.....	三五		



古	香	(新体詩)	三
今	様	豪傑	(新体詩)
			四〇
呪	咀	(新体詩)	四六
紅	賣	(新体詩)	五二
霜	柱	(短歌)	五三
紫		(短歌)	五八
短篇	五題	(新体詩)	六〇
血	寫	歌	(新体詩)
			六二
斷	雁	(新体詩)	七一
晚	秋	の歌	(新体詩)
			七五
傘	の	ら	ち
			(美文)
			七九

白	鼠	の	賦	(新体詩)	八三
疎			狂	(新体詩)	八九
零			丁	(新体詩)	九一
春	の	惱	み	(新体詩)	九五
盆			祭	(新体詩)	九八
芋	魁		集	(短歌)	一一一
雀	の		賦	(新体詩)	一二〇
豊	臣	秀	吉	(新体詩)	一二四
懊			惱	(新体詩)	一二九
三	人		旅	(新体詩)	一三六
荆	叢	毒	蒞	(短歌)	一四六

◎ 斷	霞 (新体詩) .....	一五〇
漢城雜詩 (短歌) .....	一六一	
◎ 小題大做 (新体詩) .....	一六六	
銷魂錄 (短歌) .....	一七一	
景福怨 (短歌) .....	一七三	
小百合 (新体詩) .....	一七四	
袖の霜 (美文) .....	一八一	
出頭没頭 (新体詩) .....	一九五	
◎ 鏡影 (新体詩) .....	二〇〇	
明星 (短歌) .....	二〇八	
小鬟紅釵 (短歌) .....	二三二	

# 鐵幹子

與謝野寬著

## みやすどころ

(三十八年一月作)

「あらし絶えて見えたまふ、  
 さはうるはしや、わが右手の  
 しら刃をわしり血は流れ  
 染めぬ宵間に女房らが  
 心もちゐしなごやかに

臥しよき褥、しろがねの  
てすりも、床も、しら綾も、  
わがまだ知らぬ地のうへの  
いとよき花の真紅染。  
よし、彼のわかき歌びとぞ  
夢みごこちのまなざしに  
いしくささやき語りしは、  
城もて換ゆる珠いくつ  
みづらを垂るも、八つの馬  
こがねの車ひきぬるも、  
わびしからじか、あたたかき  
おのが心を見いでずば。

ふたりがかはす消息は  
三たびになりぬ、ほのぼのと  
大きはなびらしらはちす  
心のそこには香を開く、  
こはわが王のなに知らむ、  
心の花の消息を  
下司のすさびや、ぬすみ見て  
おん人悪ろのいきごほり、  
人の喚ぶなるうたて名の  
御息所と斯くて身は  
なづさひまつれ、心さへ  
宮なるものとおぼせるや。

いざわれ往かむ、ふるさとの  
西のみやこの院ならで  
心を栖ます夏の園

四

髪もほつれず、さはいへど  
胸のゆらぎとつく息と  
すこしみだれて、戀の性  
親王のかばねをそがひにし、  
ひと重しらぎぬ、おん裾に  
なびくみづいろ、いと小さき  
葵染めたる夏すがた、  
鏡を前にし、しばしわが

けだかく、きよく、なよびたる  
昨日にまさり、うるはしく  
つよきなきけを加へたる  
すがた見ほれて立ち給ふ  
御息所を、あたふたと  
手燭さしのべ家、  
るよめぐれば、髪じろの  
父大宮は狂ほしき  
殿の扉ひらき倒れたまひぬ。

暮

鐘

(三十三年六月作)

ゆふべお茶の水の橋に立つ

五

車多し人多し塵多し  
揚々たるは誰が子  
戚々たるは誰が子  
一味の慈悲を神に責むな  
聞けニコライの鐘人を咀ふ

哀情か戀情か富貴か名か  
西に狂し東に奔り笑みつ泣きつ  
わあ人の子の忙しき  
何れか行きて運命の  
底しらぬ淵罪惡の  
黒き濁りに身をば投げぬ

世を擧げて盲す  
見がたし古の人  
萬巻の書も何の價ぞ  
ただ蠹魚の尿に任す  
有りや勇猛裸體の子  
能く道念の火を抱き  
千載の下とには消えし  
理想の火山に火かくる

これと思ひ彼を思へば心冷むて  
情たるを我影涙おちぬ

仰ぐよ瘦せし手額てがらにあてよ  
明星めいせいかしこに獨りあかき  
我われに珠玉しゆぎよくの歌はなきも  
翼つばさあらばいで地を搏つて  
いなんを彼空かのそらあゝあゝ高し

廻燈籠

(三十三年六月作)

あしたに冠かむりの塵ちりを弾はじき  
ゆふべに衣ころもの垢あかを洗ふ  
那智なちの神山かみ山やま瀧たき百尺ひゃくじち  
淹留えんりゅう三月さんげつ秋あきに入りぬ

白龍はくりゆうながき髻びんを垂れて  
八百八島はちひゃちじま夏寒し  
五大堂だいごだう下の夢いづこ  
松の月松の風松の雨

單騎たんき城しろを出で、闇やみをつく  
夏草なつくさふかし孔くちら徳里とくぢ  
好機こうきまた無し立たつや立たすや  
老王らうわううなづく蚊か遣ぢのかけ

我われに大雅たいがの古韻こいんなきも

君に玉瀾の繪筆あり  
清瀧の茶屋嵯峨の茶屋  
竹にいねたる涼しさよ

### 舞妓君子

(三十三年十一月作)

その一  
韓のみやこのつれづれに  
こよひあひ見る酒のまへ  
うまれはおなじ西京と  
先づきけるこそ嬉しけれ。

いかなる親のころより  
千さどへだたるあら國へ  
いとし愛娘をわたらせて  
何とてさする憂きつとめ。

十四十五ははつはなの  
まだ戀しらぬあどなさを  
ことば訛れるうかれをに  
もてあそぼるゝ是非なさよ。

その二  
みづよのぞゆるしら梅の  
雪のはだへのけだかきに

つきをかけたる紅梅の襟にあまれるにはひかな。

舞のすがたにふさはしきはるの小室のはなあふぎ唄のこころにかよひたるあきの嵯峨野の裾模様

ゆたかにあぐるふり袖にこの世をつつむ風情みえかるくかざせる舞の手にほとけを招くちからあり。

その三

ふるさといでて我もまた十とせあまりを旅のそらはからず逢へる君ゆゑによろづむかしの忍ばるる。

ともに憂身を語りなば酔ひたる酒もさめぬべし。しばし鼓の手をやめてわがさかづきを受けよかし。

君がそだちし祇園なる



神のやしろの花の精  
いつかあどなき頬に入りて  
そのゑくぼとはなりにけむ。

その四

水におちたるむくろじの  
くろめがちなるまなざしを  
羽子のはねよりなほかるき  
人のなさけにそそぐなよ。

雨にほころぶ海棠の

そのいちらしきくち紅を  
花の露よりなほもろき  
人のこころにうつすなよ。

をとめの春のたのしさは  
ただおびどめの蝶のゆめ  
指なるたまにたれの名も  
まだ見えぬこそさかりなれ。

落花吹面

(三十三年四月人々大宮に遊びて酔中に作る)

堇	の	大	説	お	永	誰	似
つ	が	道	く	う	き	ぞ	非
み	れ	車	な	お	日	や	と
た	て	塵	末	う	か	茶	寂
る	ひ	の	世	冷	す	の	静
小	と	堆	の	た	み	前	と
指	日	き	汚	き	て	濫	は
は	を	を	れ	人	花	面	我
染	野	見	と	の	の	つ	ら
め	中	す	濁	唇	ち	く	が
じ	の	ば	り		る	る	禁
	水				に		句
	に						

主	錢	舞	踏	鈴	池	こ	善	あ	一	み
典	は	を	ま	の	を	れ	い	か	刷	や
が	せ	あ	知	ん	音	め	神	か	き	毛
も	老	ら	ら	は	ほ	ぐ	境	な	宮	な
て	い	ず	ず	畏	の	り	ぞ	素	居	で
こ	松	も	も	し	か	て	松	蓋	に	た
し	か	歌	劍	花	に	深	の	之	祀	る
樽	げ	は	を	か	人	く	は	男	を	森
を	に	あ	知	雪	を	入	や	我	を	の
割	踞	る	る	か	引	れ	し	心	聞	朝
る	し	子	子		き	ば		え	け	靄
を	て				て			た	り	ば

日小<sup>こ</sup>うわ花春<sup>せ</sup>陣<sup>ぢん</sup>無<sup>な</sup>秀<sup>う</sup>案<sup>あん</sup>わ人  
 傘雨<sup>あめ</sup>れれの廣<sup>ひろ</sup>鐘<sup>かね</sup>念<sup>ねん</sup>才<sup>さい</sup>にかの  
 花ふしの賦<sup>ふ</sup>す破<sup>や</sup>のほきい  
 笠れや無<sup>な</sup>つがら御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>へいの  
 むふ清<sup>きよ</sup>禮<sup>らい</sup>くたん前<sup>まへ</sup>口<sup>くち</sup>るのち  
 られ會<sup>あひ</sup>をるに世<sup>よ</sup>のな泡<sup>うた</sup>ちを  
 さ隠<sup>かく</sup>女<sup>むすめ</sup>人<sup>ひと</sup>か足<sup>あし</sup>に黄<sup>わう</sup>どのは酒  
 きれ伴<sup>ばん</sup>ど滑<sup>か</sup>駄<sup>だ</sup>も旗<sup>はた</sup>かう酒  
 のてもが稽<sup>き</sup>はあし辭<sup>ことば</sup>への見  
 傘いまめたきららせに泡<sup>うた</sup>れ  
 なじすりてす旗<sup>はた</sup>んかば  
 なるな

人<sup>ひと</sup>を戀<sup>こひ</sup>ふる歌

(三十年八月京城に於て作る)

妻<sup>つま</sup>をめとらば才<sup>さい</sup>たけて  
 顔<sup>かほ</sup>うるはしくなさけあ  
 友<sup>とも</sup>をえらば書<sup>かき</sup>を讀<sup>よみ</sup>んで  
 六<sup>む</sup>分の俠<sup>げき</sup>氣<sup>き</sup>四分<sup>しふぶん</sup>の熱<sup>ねつ</sup>  
 戀<sup>こひ</sup>のいのちをたづぬれば  
 名<sup>な</sup>を惜<sup>おし</sup>むかになどゆれば  
 友<sup>とも</sup>のなさけをとぬれば  
 義<sup>ぎ</sup>のあるとけをたづぬれば  
 踏<sup>ふ</sup>む

小野の山ざと雪を分けし  
夢かど泣きて齒がみせし  
むかしを慕ふむらこせし  
見よ西にバルガンの  
ろれに北にバルガンの  
あやふかたらや雲裂けて  
天火ひどた降らん時  
妻の子をわすれ家をすてや  
義のため耻をしをふとや

くめやうま酒うたひめに  
をどめらのぬ意氣地あり  
ま記の筆をとるわかも  
あゝわれコレリッヂの奇才なく  
パイロン、ハイチの熱なきも  
石をいさびをよるこばす  
芭蕉のさびをよるこばす  
人はわらへな業平が

君「あやまいらすくあらはなるを  
 君なれらではた誰か知るば  
 酒に狂ふと人の高ければ  
 わが歌ふ人の高ければ  
 かむ劍つるぎは鳴なりをしのふとこの  
 かなせふ涙をしにうけてや  
 かなしき歌の無からんや

遠くバルザイテや腕うでを摩さすかん  
 ガ玉を北きた道みちのれ訛まごる大た官くわんは  
 健けん憐れんなよ散ちりてむ影かげも南なんのりし  
 四しのたみひ玄げん海かいの浪なみをこえれば  
 韓かんの日ひにかなはしる雲うみの色  
 秋あきのしにかなはる雲うみの色

むね  
くんな  
なる  
きる  
かな  
燃ゆる  
血の

おのづか  
さらな  
る天  
地を  
戀ふる  
なさを  
いは  
洩す  
とも  
人罵り  
世を  
秘め  
よかし  
はげし  
き歌  
をい  
かる  
かし

口をひら  
けば嫉  
りあり  
筆を  
にぎ  
れば  
譏り  
あり

友を諫  
め泣か  
せても  
猶ゆ  
くべ  
きか  
綾首  
臺も

おなじ  
憂ひ  
の世  
にす  
めば  
お千  
里の  
そら  
も一  
つ家  
め  
ば  
やお  
のが  
袂  
のな  
みだ  
ぞや

はるば  
る寄  
せし  
ます  
ら  
を  
の  
けふ  
北漢  
の山  
のう  
へ  
づ  
る  
方

劍 銘

(三十年一月京城に於て作る)

佛きたらんか佛を斬らん  
祖師きたらんか祖師を斬らん  
わが手わが心二祖師を斬らん  
敵はたのがれんや  
朱鞘七尺露たる  
ぬけば露たる  
銘は誰れぞ

備前兼光

未だ知己の墓に掛けず  
ひッさげて遊ぶ六大國  
かの蘇秦の徒を嗤ふ  
なんぞ爾くの多辯なる

愚庵十二勝歌

(三十年四月鐵眼禪師の爲めに作る)

歸雲巖  
龍の巖  
かりそめにねぶれる

となりて猶も雲よぶ夢や見  
 るらむ石洞巖窟の火をばよ  
 たよまにつる巖窟の火をばよ  
 なよまにつる巖窟の火をばよ  
 いぬらしに菩薩天降りうけて  
 梅の花溪の**か**ばねうづめ  
 酒すきの**翁**の**か**ばねうづめ  
 たる谷の巖間に梅さきにけ  
 りる谷の巖間に梅さきにけ  
 紅杏林はさかりのおぼ  
 桃の花はさかりのおぼ  
 から

る夜をあるし物申す笛はあ  
 らすや清風關士訪ふと出で  
 板の戸を道士訪ふと出で  
 てみればまた山かせの叩く  
 なりけりままた山かせの叩く  
 碧梧井ひかり涼しき山  
 ありあけのひかり涼しき山  
 の井に梧の葉そよぎ露ちら  
 んとす梧の葉そよぎ露ちら  
 月を上人ながく定を出  
 月を上人ながく定を出



かな抱わなりな影ら  
 なへががかをがと  
 三抱う古にりき爛笑  
 の抱ゑる松しに日柯石  
 木と小松は早もふた  
 なりけける  
 なりきく雲の  
 なりきく雲の

天風ら巖る花米にで  
 狗ふはにす  
 ゐ嘯くら立錦み舛探り山  
 り月とち楓てわ菊の  
 瓦壇紅葉るもはらへばは  
 のうへにかからか  
 のみだれて秋の  
 佛にいつ餓ゑす菊の  
 につめはうみはて

葛 紅葉

(廿九年の秋より冬へかけての作)

玉 櫛に ○ ねくたれ髪どきて  
見 人羞し かるべき朝顔の花  
君 みれば 戀しさまる筆と  
れ ば物ぞ書かるる秋の初風  
う めも ○ せき珠につなぎて兄

ら ぎみの雪の達摩にいざまゐ  
ら する ○ 紙燭ささせて白  
わ らの夜に せわためぐり見  
し 菊の夜に せわためぐり見  
し かな ○ 菊の花がさ霜ふ  
し ぐれなば 菊の花がさ霜ふ  
ら ば紅葉の錦きてかへりま  
せ (人の石見に行く別れに)  
夢 なら ○ ば艶ひし人のはてな

らむ秋野の露に蝶のよわれ  
三十四

の焼鎌のつみの鎌なかりてはらはん  
影の利鎌なしたる三日月

こほろぎはわぶる實の方す  
むしは老いし小町の後身か  
どぞ思ふいし小町の後身か

うつばりの塵は見えねどわ  
うつばりの塵は見えねどわ

が笛にわれと心の動く夜半  
かなにわれと心の動く夜半

のがるべき山のはざまは胸  
にあり市にゐるながら薬とら  
ばや

江上曲

(三十二年十一月京城に於て作る)

谷間の雪に熊を追ひ  
峰のあらしに虎を狩り

荒<sup>あ</sup>山<sup>やま</sup>の中<sup>なか</sup>の小屋<sup>こや</sup>にねて  
 小<sup>こ</sup>瓶<sup>びん</sup>の酒<sup>さけ</sup>の黒<sup>くろ</sup>めにて  
 あましの酔<sup>よ</sup>ひのひてをわたる  
 北<sup>きた</sup>のさかひの若<sup>わか</sup>人<sup>ひと</sup>よ  
 南<sup>みなみ</sup>の國<sup>くに</sup>のかもよ  
 わが船<sup>ふね</sup>歌<sup>うた</sup>を聴<sup>き</sup>けよかし

十<sup>じゅう</sup>里<sup>り</sup>あたざる都<sup>みやこ</sup>より  
 公<sup>こう</sup>達<sup>たつ</sup>あまたか  
 こがねのくわわにほませ  
 にしきの手<sup>て</sup>か花<sup>はな</sup>興<sup>きよう</sup>に  
 まばゆき玉<sup>たま</sup>ののり  
 てはませ

載<sup>のり</sup>せたまへるは誰<sup>たれ</sup>が兒<sup>こ</sup>ぞや  
 春<sup>はる</sup>かせかすむ江<sup>え</sup>のほとり  
 きては柳<sup>やなぎ</sup>を折<sup>を</sup>りかざし  
 みどりの酒<sup>さけ</sup>にあげたまふ  
 高<sup>たか</sup>き歌<sup>うた</sup>のどかなれ

古 香

(三十年の十二月戯れに舊稿を石函に藏めて僧に托し北澤山に埋めさせける時)

あをぐもの上に御<sup>おん</sup>親<sup>おや</sup>あり  
 わが手にたまふ玉<sup>たま</sup>の筆<sup>ふで</sup>

神	さ	よ	ほ	の	荒	地 <sup>ち</sup>	嫉	み	五 <sup>い</sup>	む
に	ら	ろ	ね	ち	き	に	み	そ	百 <sup>ひ</sup>	ら
い	に	づ	た	二	す	の	お	ら	重 <sup>ち</sup>	さ
の	を	の	く	萬	さ	こ	そ	に	の	き
り	の	書 <sup>ま</sup>	ま	年	び	さ	れ	お	し	に
て	こ	に	し	す	に	ば	て	か	た	ほ
あ	の	あ	き	急	も	龍 <sup>り</sup>	奪 <sup>ち</sup>	ば	に	ふ
め	血	き	人	の	て	神 <sup>が</sup>	ひ	鬼 <sup>た</sup>	護 <sup>た</sup>	天
つ	に	は	の	世	ゆ	の	な	神 <sup>が</sup>	れ	つ
ち	か	て	子	に	か	ん	の	か	雲	
の	つ	ゝ	が		ん			し		
			急							

と	わ	く	真 <sup>ま</sup>	女 <sup>め</sup>	透 <sup>す</sup>	書	太	霜	深 <sup>と</sup>
き	が	ま	名 <sup>な</sup>	神 <sup>が</sup>	き	く	古	ふ	紅 <sup>く</sup>
は	の	れ	井 <sup>い</sup>	き	か	や	の	る	の
に	こ	て	の	て	げ	靈 <sup>れい</sup>	や	夜 <sup>よ</sup>	星 <sup>せい</sup>
盡	し	盡	し	く	き	な	ま	半 <sup>はん</sup>	の
く	お	く	み	む	よ	る	の	に	か
る	く	る	づ	あ	き	な	あ	あ	げ
こ	こ	時	底	け	玉 <sup>たま</sup>	が	ら	ま	さ
と	の	あ	ふ	が	腕 <sup>うで</sup>	き	巖	く	え
勿	歌	る	か	た	に	歌	に	だ	て
れ	よ	も	く	の				り	

きわ	あ	師	名	ま	な	い	う	け
よ	れ	を	に	ゆ	ど	つ	き	ふ
きは	君	は	媚	す	う	は	草	は
なわ	こ	づ	び	み	か	り	み	む
がす	そ	か	黄	つ	れ	お	れ	か
れれ	は	し	金	く	め	ほ	ば	ひ
にす	く	め	に	り	を	き	あ	の
口五	や	友	へ	紅	惟	世	は	岸
す十	し	を	つ	を	ま	の	れ	に
ゝ鈴	け	賣	ら	さ	ん	中	な	さ
ぎ川	れ	る	ひ	し		に	り	く
				て				

ひ	躍	打	こ	巖	あ	た
ど	り	つ	の	が	め	け
り	あ	い	た	根	か	き
其	が	な	か	づ	せ	生
子	り	づ	や	た	す	命
の	て	ま	ま	ひ	さ	を
讀	高	の	に	咒	ふ	も
む	ら	ほ	登	を	常	と
を	か	か	り	と	闇	め
許	に	げ	き	な	に	つ
さん		よ	て	へ		ゝ
		り				四十

今様豪傑

(舊友某に示す三十一年七月作)

濁りゆく世をなげきては  
もりに泣きつる夏の月

をこのなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた  
たのこなみさけつ世のすがた

わかれはわすれず笠置山  
松のしほに袖ぬらし  
ふたりの昔をくし秋の旅  
齒がみせられし秋の旅

慾ゆるこゝろ亡へる  
村人にくさし牛裂き  
裂く飽かしと憤り  
夕日に泣きし城の跡

中學のには雪なげの  
そのあさは君は軽薄  
誰れを罵りこらしめて  
いかる拳に打ちすゑ

打たれし彼妻もいまは見よ  
三十一をどこ妻もいまは見よ

馬知む夢都<sup>や</sup>打まくあ  
 ぐるかに人<sup>は</sup>ぶたすさ、  
 るやしものれしられ彼  
 ま知飲見服<sup>拾</sup>ぎめをは友  
 やらみ<sup>と</sup>の衣<sup>せ</sup>ざ君<sup>ま</sup>てに  
 るずたなあにるがたう  
 君やる寄たくがひるら  
 を路缺宿、ら憾た浮う  
 見のけ舎かぶみひれへ  
 てか茶にされかが女に  
 げ椀ばなみの

さこ兩くた誰た誰書北  
 けれのづだれだれをあ  
 び我手れ厭か厭か讀め  
 しとあかふはふはみり  
 君ちげ、り富な名なか  
 はのてれりをりをがに  
 今こふる不ね不ばらさ  
 い、せ世義が義惜<sup>ま</sup>び  
 かるがのの<sup>は</sup>の<sup>ま</sup>し  
 にぞば浪富<sup>は</sup>の<sup>ま</sup>く  
 とやをるるをるも



秀でし才をかなしやど  
涙せきあへぬ我の愚かさ

咒 詛

北の海凍るこど十丈  
太古の山雪に瘦せて  
峨々として聳ゆ五万尺  
氷をくだく大あらし  
入日の前に吹きやみで

十谷七洞よるしづか  
鬼ひとつあり眼を眇す  
乾<sup>ほ</sup>うしはしきかんな女の色  
あぶらを死馬の骨<sup>ほね</sup>に盛り  
ほほとら火を吹く氷<sup>こほり</sup>の上  
かいはやき青し谷また谷  
ましろの<sup>きば</sup>牙を鳴らしつ  
時はりかてあゝと息をつき  
はた冷か<sup>あ</sup>に一笑す

いま何ぶとを思ふらん  
黒き胸毛をかきはらひ  
だみたる聲の高く低く

牛の肉くふ人の世に

涙をしぼり血をしぼり  
戀にもだえて若き子の  
戀の歌よむをかしさよ

わが冷かに火を吹きて  
をどめの胸におくるとき  
戀のぞみの光ぞと

おろかや若き人の笑む

火をふきやめてあゝと計り

つめたき息を送るとき  
はかなき戀の闇に泣き  
世さへ神さへ怨むらん

たえし膏あぶらば添へながら  
再びほそき火を吹き  
をどめの胸の雪の上  
かろき笑ひをおくるとき

鬼 <small>ま</small> ひ <small>ひ</small> 十	ま <small>ま</small> あ <small>あ</small> 歌	世 <small>せ</small> 命 <small>めい</small>
形 <small>かたち</small> と <small>と</small> 谷 <small>や</small>	た <small>た</small> ゝ <small>ゝ</small> ひ <small>ひ</small>	に <small>に</small> を <small>を</small>
の <small>の</small> 足 <small>あし</small> 七	も <small>も</small> と <small>と</small> す <small>す</small>	の <small>の</small> す <small>す</small>
人 <small>ひと</small> づ <small>づ</small> 洞 <small>ほら</small>	火 <small>ひ</small> 一 <small>ひと</small> と <small>と</small>	こ <small>こ</small> て <small>て</small>
の <small>の</small> つ <small>つ</small> い <small>い</small>	を <small>を</small> 息 <small>いき</small> と <small>と</small>	れ <small>れ</small> て <small>て</small>
歌 <small>うた</small> に <small>に</small> く <small>く</small>	吹 <small>ふ</small> つ <small>つ</small> は <small>は</small>	る <small>る</small> 名 <small>な</small>
の <small>の</small> 遠 <small>とほ</small> め <small>め</small>	く <small>く</small> き <small>き</small> 牙 <small>きば</small>	は <small>は</small> を <small>を</small>
こ <small>こ</small> ざ <small>ざ</small> ぐ <small>ぐ</small>	頬 <small>ほ</small> な <small>な</small> を <small>を</small>	何 <small>なに</small> を <small>を</small>
忍 <small>しの</small> か <small>か</small> り <small>り</small>	の <small>の</small> が <small>が</small> 噛 <small>か</small> み <small>み</small>	か <small>か</small> て <small>て</small>
る <small>る</small>	青 <small>あお</small> ら <small>ら</small> み <small>み</small>	あ <small>あ</small> て <small>て</small>
	さ <small>さ</small>	る <small>る</small>

か <small>か</small> 涙 <small>なみだ</small>	戀 <small>こひ</small> つ <small>つ</small> 抱 <small>かか</small> あ <small>あ</small>	紅 <small>べに</small> 愛 <small>あい</small> 笑 <small>わら</small> を <small>を</small>
の <small>の</small> に <small>に</small>	の <small>の</small> ひ <small>ひ</small> け <small>け</small> ゝ <small>ゝ</small>	さ <small>さ</small> ら <small>ら</small> 靨 <small>くま</small> と <small>と</small>
達 <small>た</small> ぬ <small>ぬ</small>	最 <small>も</small> に <small>に</small> る <small>る</small> 愚 <small>おろ</small>	し <small>し</small> の <small>の</small> め <small>め</small>
人 <small>ひと</small> れ <small>れ</small>	期 <small>き</small> 惑 <small>まど</small> 玉 <small>たま</small> か <small>か</small>	指 <small>ゆび</small> き <small>き</small> 池 <small>いけ</small> は <small>は</small>
の <small>の</small> し <small>し</small>	の <small>の</small> ひ <small>ひ</small> を <small>を</small> な <small>な</small>	に <small>に</small> 名 <small>な</small> に <small>に</small> 燃 <small>も</small>
眼 <small>まなこ</small> 歌 <small>うた</small>	は <small>は</small> を <small>を</small> 蛇 <small>へび</small> り <small>り</small>	毒 <small>どく</small> に <small>に</small> 蛇 <small>へび</small> ゆ <small>ゆ</small>
に <small>に</small> 反 <small>はん</small>	か <small>か</small> 悟 <small>さと</small> に <small>に</small> わ <small>わ</small>	を <small>を</small> 呼 <small>よ</small> を <small>を</small> る <small>る</small>
入 <small>い</small> 古 <small>こ</small>	な <small>な</small> ら <small>ら</small> く <small>く</small> か <small>か</small>	盛 <small>も</small> ば <small>ば</small> 伏 <small>ふ</small> 花 <small>はな</small>
ら <small>ら</small> は <small>は</small>	さ <small>さ</small> ざ <small>ざ</small> れ <small>れ</small> さ <small>さ</small>	る <small>る</small> れ <small>れ</small> せ <small>せ</small> の <small>の</small>
ず <small>ず</small>	よ <small>よ</small> る <small>る</small> て <small>て</small> 子 <small>こ</small>	た <small>た</small> て <small>て</small> 頬 <small>ほ</small>
	よ <small>よ</small>	の <small>の</small>

紅 賣

梅の老木は鐵を鑄るも  
見すや咲く花星を綴る  
ゆるせをこのひろき胸に  
細眉るがける君を捲くを

おとろへたるかな錢のなきに  
祇園の花ごき紅を賣るか  
さはれ猶あり家の大刀  
文殻あつめてほとけ張らじ

薦たき舞姫袖を掩ひ  
厭ふか酒呼吸まこと初心や  
憎くとしければ人の泣くに  
か酷くあたらぬ

霜 ば し ら

ありあけの月のみやこの殿造りさな  
がら見する霜ばしらかな

西京に歸りて東山に飲みける時  
玉のごとおぼゆる子等にきせぬべき

紅葉のにしき菊の花笠  
わが歌の絲にのらぬをいぶかりぬ紅  
き釵の花のごとき人

秋になりて來ずなりたる人の文のは  
しに扇をわすれたるよしいひおこせ  
たれば索めさせけれども見ぬざりけ  
りさて云ひやりける

わがやぎに秋の扇はなかりけり君は  
その名や忘れたりけん

三十年の秋平安黃海の両道に遊ばん

とて京城を立ちける日

われ死なば後の五百とせ人ありて今日の

すがたを繪にもかくべき(あんべら帽の古びた

るいぶり、脊廣きて、一刀を脊に負ひ、草鞋はきたるいでたちの、我  
ながらをかしくて)

家持も眞淵も知らぬ韓山をわれにま  
かせて歌よめと云ふ

おなじ旅に京畿道のくやをの里に宿  
りて

くやをの里は漢江の岸にありて、戸數纒に十三、三面は野  
一面は水、黍畑大豆畑入日に黄ばみて、葦の花風の前に  
乱れ、門を出づれば人なれぬ犬の二匹三匹わが影に吠ゆる  
など、そゝる物寂しき孤村のさまなり。一醉の後、安寧涿  
君と打つれて後ろの丘にのぼる。丘は雜木林なるに、枯れ  
たる葉のさらさら風に鳴り、下草には長四尺ばかりな

る野菊の花も珍しく大きなるが、雪の高きやうに咲きみだ  
れたり。小高きところに分け入りて佇むに、陰曆八日の月  
あかあかと對岸の山をてらし、前なる長江をてらし、雜木  
林の二人の影をてらす。われは何事を思ふこともなく愴然と  
して泣かんとしぬ。城へかれて覺えず嗚呼と一聲すれば、  
朝鮮鳥の羽音かるく、向ひの岸へかちちと啼きて飛びた  
る、我れ生れて未だ斯ばかり物哀れなる夜のさまを見ざり  
し——(黄花南國記一節)

くやをの村われと幾生のえにしあり  
てこの夕風の身にはしむらん

おなじ旅にはんがんより造浦に向ひ  
ける舟中

夕月又船つなぎをれば雁なきてたけ

一丈の葦の花ちる  
筥とまの上に葦の花ちる 薄月うすつき夜ねられん  
ものか家を戀ひずして

また黄海道の金川にとどまりける頃

雁かりなきて菊の花さくこのころを鄙びの  
長路ながちに我れ瘦せにけり  
霜しもふみて落穂おちひろふ子われに似て母  
はあらずと泣きて語れる

山茶花

菊に先づよき名どらせて山茶花さんぢあなはま  
こどをばりの霜に咲く花  
山茶花も妹が垣根にさきてより身に

しむ花となりけるかな

某に示したる

子の日にも二葉のほごぞひかれける

我や大野にひと本ある松

禪に耽けりる頃

水仙は石の上にも咲きにけり心の華

はいつひらくらん

紫

三とせ前より相知れりける人の、さりがたきことのありて  
本國へ歸ると云ふに、ごごめもあへずして、京城にてよめ  
る。卅年八月。

むらさきの根摺のころもあさからぬ  
君にも今は別るべきかな  
相見てはうらみも云はずなりにけり  
よわきなさを何時ならひけん  
花よちれかくて浮世はあだなれやさ  
らばぞ人の雄心も見ん  
つらしとは人も思はん我も思ふ書よ  
む身にはなご生れけん  
をしとおもふ君をひがしの空にやり  
一人や泣かん韓の荒野に

短篇五題

月

小僧ねむいか夜中の寒さ  
それまゐらする捧ひどつ  
おれは太鼓うつ貴様は踊れ  
あのわかい月松をしに

萩

月にむかしの源氏名さかれ  
小萩いまさら耻かしく

やつれすがたよ真垣にもたれ  
されば紫と申しける

木犀

さよの寝巻の移り香と泣いて  
いとと見たり夢に候  
むかしの宿の木犀ひと枝  
手紙に添へてまゐらす

歸去來

やもめ暮しの氣樂さは  
泣いて縁さる世話も無い



茄子、どうなす、どうの芋  
裏のはたけに金かなる

女

癪のあるこそ女はよけれ  
すねるのもよい無理もよい  
宵の笑顔が壹分なら  
泣いたまぶたに五兩だる

血 寫 歌

(三十年十一月作)

正義とは

悪魔が被ぶる假面にて  
功名は  
死をよるこばす魔術かな

おなじ世界に生れ出で、  
親もあり  
妻もある子を  
名をつけて  
勇しき名のチャンピオン  
かわいやな  
いくさにやれり遙々ど  
見もしらす

なれもせぬ  
万里の空のひとの國

かしこしと  
誇れる人の  
西にあり  
ひがしにもあり  
なにはほとの  
かもしこき人ぞ  
むかしより  
魔に魅入られて  
今もなほ

まよひはさめず

あはれやな  
人を殺して涙なく  
おそろしや  
生血に飽きて懺悔せず  
英雄と  
われから誇り  
豪傑と  
一世を愚にす  
骨を積みて

花はかざる金殿玉樓  
血を塗りて  
星はかゝやく勳章寶纒  
あゝ百千の罪惡を  
そこに一部の文明史

いたはしきかな

ちゝ母は

老いてたよりの

子にはなれ

あはれなるかな

たをやめは

二世のをつとに

わかれつつ

いちらしきかな

乳のみ見は

まだ父親ちちの

顔しらす

「忠義には猶かへがたし

あつばれ手柄したぞ」とは

あゝあゝ人を殺せよと

えせ聖人のをしへかな

舟

中

(以下四篇十二月作)

また秋かせに帆をあけて  
浦鹽の海ねてわたる  
星月夜ころをかしけれ  
なにを荒ふるあら浪ぞ  
をりをり船にくだけては  
ほほ黒髪をぬらしける

蘭

谷間に蘭の花を摘む

露こそかをれわが袂  
摘みつる花はやさしき  
なごか風情の君に及ばぬ

妹

かなし妹こゝろさへ  
亡き母ぎみに似たるかな  
人は花なるどしころを  
ひとりわびしく家にゐて  
旅なる兄のわがまを  
ちいさき胸になげくらむ  
春衣に添へてやさしくも

ながさ諫めの文はとどきぬ

鳥

鸚鵡の籠は身にせばし  
うぐひすの餌は飢ゑぬべし  
鷹はけつめをほだされて  
なほ紫の緒に誇り  
鶴はつばさを断たれても  
溝なす池をしたらふとや  
鴉はおろか鶺鴒はいやし  
いまさら誰とかわらはん  
とてもこの世は聞とみて

こもりはてばや山の奥  
あはれめしひと我を呼びて  
もの見る人は誰にかあるらん

断

雁

(卅年三月作、友人堀口香坡の和蘭國日本公使箱にあるを憶ふ)

さみ大學にありしとき  
わが名を聞きてめでしとか  
われ韓山に逢ひしとき  
はじめて君を慕ひけり

身はすべて膽さみが勇  
口はみな花われの歌  
しろき芙蓉に朝の露  
わがなさけども思へかし  
きよきつるぎに夜半の霜  
君がころにたとへばや  
時しいたらば隻手よく  
すたれし國もれこそすべし  
世にし遇はずば少女の  
あかき袖にもかくれなん

どもに歡びいさどほり  
どもに語らひなぐさめて  
あゝ義に富める武に富める  
あゝ酒ずきの戀ずきの  
むつまじかりし我友は  
三とせを遠き和蘭陀へ  
蘆ちる海の秋の雨  
泣きて愛身をかこつとき  
桃さく國の春の月  
酔ひて小琴をどるゆふべ  
たのしさにつけ憂につけ

先づ君ころは戀しけれ

七十四

國と國とのまじはりに  
君のつかさはおもけれぞ  
君のちからに和蘭陀は  
あまりに國のしづかなり

如何にひがしの空を見よ  
今すさまじき雲の色  
をかしかりつる韓山の  
血潮の夢もしのばるる  
あゝこの酒にともしびに

ふたり語らぬさびしさよ

### 晩秋の歌

しらつゆ霜とおさかはる  
草葉に蝶の夢ありや  
柿の葉あかさ夕かげに  
ちからなきかな蜂のむれ

世に知られざる歌びとの  
怨みて墓に入るごとく  
石ひややかに蟋蟀の

七十五

聲もよわるか秋の暮

出でて牧場をながむれば

雲されざれに屋の上を

木がらし吹きて若駒や

いななき人を愁ひしむ

苅りのこされし畦桑の

たち枝をくだるむら雀

げにあさましや鷹隼の

空に血を搦つ羽のおと

蛇は早くもふゆをもり  
くさむら深く入りしかど  
落穂をわさる田鼠の  
ものに候るる風情あり

しろき牛おふ里の子よ  
家路をいそぐこと勿れ  
くれゆく秋のさびしさを  
るの竹笛に吹けよかし

綿木を荷ふ小むすめよ  
とれや白地の頬かぶり



やさしからずや枯れ残る  
野菊を鬘にかざしみよ

七十八

けぶりの末に星見えて  
犬吠えかかる村の口  
口をくらしたる門附の  
宿りさだめぬ夫婦づれ

いざ来よ寒き宿なれを  
こよひ芋汁栗のめし  
酒あたためてかたらずや  
紙治が戀の歌の一ふし

### 傘のうち

(卅二年八月記)

その十八の夏なりき。別れがたきことあまた言ひて、互に泣きて、さらば何か書きてやらむ、鴛鴦の枕の紙捻にはすとも、かまへて帶揚のなかなどには入れ給ふなどて。——えやは忘るゝ、立ちて語らひしは疏水のみぎはなりき。

清瀧の水車が妻にもらはれて朝は紗  
浣ふ暮は蓮を探る

京畿道の三角山に寺僧をたよりて、世を忍ぶ浪人とは大袈裟なれど、ひそかに何がしの薬など錬りて潜める頃、そぞろ京城

七十九

の事の氣にかかりて、一人を夜半に立たせやりつる、憶へば昨日の夢の跡はづかしく、小兒めく悪戯は何時やむべきにや。

山門に人を送れば夜はふけぬ天の川

しろし二人立つ影

堺の街燈はつい眼のさきに見ゆれど、まだ十五六町もあるべし。焼か火のでると云ふが幼な心にははくて、急ぎ足に仁徳陵の前を通りぬけし時、横手の畦路より出でて先に立ちゆく爺の、小僧さん寺町へお歸りかと狎々しげなるが嬉しく、よき道づれと後より行けば、火打袋より石とり出でて、かちかちと雁首につけたる、ばつと立つあかりに見れば、七十の上なるべし、白髪あたまに頰冠もせぬが、黒き頬の瘦せ落ちて、却々に鼻筋は逞しく、額の壽命筋さざみたるやうに通り、

白く長き眉毛のしたに、兩の眼の飛び出でたらん如く輝れる。活きたる羅漢をまのあたり拜むこらしめて、尊くかしこく、身の毛ぞつとして寒さを覺えぬ。のれいまだ十二三、真宗寺に養はれて、破れたる麻の眞衣に黒袈裟かけて、三經を懐に速夜つとめてあるく頃なりき。

牛ひきさて見かへる翁かみさびぬ星かげあわき月草の中

おなじ頃の事なり。盆踊と云へば道から袈裟も法衣も某の叔母さんよ預けて馳せ出でぬ。細おもての、富士額、色の白き、その叔母さんの娘は如何にしけん。右の眼の盲ひたるがくちをもちかりしかど、田舎育ちの優しく情ある人にて、一生よろには嫁かぬ身と、悲しきこといつも我に聞かせて、弟の

やうにいとしがりぬ。よき聲の譬へば鈴のやうにて、この人  
なくては踊りには成らざりき。

わすれては踊の子らにまじるかな遠

里小野の秋の夜の月

近江より玉繭買ひにこし人もまじり

て踊る秋の夜の月

いつの夏にか、西の國より上りける人を、世のもどきもあり  
ければ、伴ひて大井川に耳洗ふとて。

夏瘦の玉瀾つれてとどまりぬ三月を

嵯峨の竹おほき里

林檎きりて葡萄つんで君かへりきぬ

月さす春戸に竹なでてをれば

この夏保津川をさかのぼりて蛇の皮ひろへる、まことは一丈  
ばかりのなりき。東京へもて上れるに、人のうれしとて練袋  
に入れたる、やがて蛇にならん用意にや。

手にまきて古き歌かく涼しさよ大蛇  
のきぬの二丈ばかり

### 白鼠の賦

(童謡十篇の一、子の歳一月作)

から、から、から、から、から、から、  
鼠の種類もいろいろあれど  
しろい鼠がいとむらは無いか

雪の柔毛の手觸り見れば  
十六新造の羞む肌  
紅い瞳はなさけの色よ  
泣けば涙が薫りさう

桐の小箱に綿や絹布入れて  
かゝる車に心棒とほし  
わしら夫婦に廻せとばかり  
坊ッ様姫様お罪が無いよ  
朝のはこべを頂いた上は  
とれとれ休まず廻しましよ

から、から、から、から、から、  
車まはれよまはれよ車  
車がまはれば時計もまはる  
時計がまはれば世界もまはる  
まはりまはらば黄金のやうな  
光明の御代もいつか来る  
から、から、から、から、から、  
「柵の鼠の不足をきけば  
わたしや大黒さんの隸屬で  
柵の隅やら押入の隅  
くらしい處で子を育て

食べますものがない故に  
 桶や鉢やを噛ります  
 それほど私か憎いなら  
 なせに十二の支干へは入れました

から、から、から、から、から、  
 謠のなかなる黒鼠  
 わしらが舊い親族ぢやが  
 かわい妻子の養育に  
 柵の乾鰯を夜盗み  
 鼠穿に死んだげな

から、から、から、から、から、  
 わからぬ世界よ疾く疾くまはれ  
 柵のめざしを夜なかに盗む  
 鼠ばかりが悪いであるか  
 見れば髭ある立派な人が  
 自分の良心を白晝盗む

から、から、から、から、から、  
 かしこがる人えらがる人の  
 舌やら筆やらさッても憎い  
 正義は偽善で涙は涎  
 野暮のうぬぼれ利口の卑下や

虚飾の世界よ疾く疾くまはれ

から、から、から、から、から、

やんがて嬉しい黄金のやうな

光明の時代が来るならば

わたしはお供坊ツ様の

家内はお供様の馬車に乗って

洋傘さしかけお馬車に乗って

大黒様へ禮参り

踈 狂

われの詩の境人を措きて

いまだ仰がす彼の蒼き空

石よりつめたき末世の娑婆に

神の呪なにの信を惹かん

たのむは酒人の狂に托し

ひだりに少女みぎには劍

わらふな方便これおのづから

毒ある大蛇を刺さんものぞ

十丈の風塵異才ありや  
誰どか談せん我れの願ひ  
永き日牡丹の花の前になげく  
虱をつぶして無聊になげく  
細眉るがける妻は往にて  
男世帯のさても不自由  
三碗の茶づけ茶は冷えたり  
あゝ五等米の黒きを見ずや

零

丁

(廿九年の秋の作)

歌よ酒よと伴狂けてゐれど  
憶ひ出しては行燈にそむき  
ひとり泣く夜の無いでない

故郷百里の片山ざとに  
父は七十いもどは十四  
こころ細かるわびすまひ  
一生不孝に泣かせた母は

おちる木の葉がせめての手向  
だれもはらはぬ墓のした

鎌倉を去る時

(卅年六月作)

ただ黙念のさよふけて  
杉の葉にさく雨のおど  
ひとりくづれる立膝に  
痛たや蚊蚊の三つ二つ  
嫌ひでもなし世の中が  
憎いでもなし人の子が

をかし今更やまでら  
なにをしてもた小半月

紀伊をさまよひて

おせろかす響つたへて世に出でん歌  
ゆゑこもる那智の神山  
わが歌の反古をも投げんこがらしに  
紅葉うづまく那智の大瀧  
那智の山てる月さびき瀧壺にわが旅  
がたな洗ひみじかな  
高野山岩をも木をもをろがまん千年  
のはとけ猶いますとよ



杉の葉にこがらし吹くもわびしきを  
 猿なく谷は雲の下なり  
 笹の葉の霜うちはらひ紀の山にわび  
 ねする身となりける哉  
 うらやまし沖の船よふ漁人の子よ我  
 は喚ぶべき人もたぬなり  
 青潮の湧きて流るゝ紀の海に舞ひ立  
 つ鷺のむれを見るかな

和歌山より大和へ志す路にて熱を病みて打臥しける  
 に合宿せる母らしきと二十一二ばかりなるさか、いと  
 まめやかに介抱してくれて、立つべき日をさへ延してくれ  
 ぬ。和歌山に籍かけてゐたるが、ふのたび自前さやら

になりて奈良のかたへ移りゆくなりさぞ。世は鬼ばかりにもあらざりけり。

はつれたる君がなさけの黒髪にまた  
 も我世のはださるるかな

春のなやみ

これ佛性か、土に生ひて  
 鈍牛ひづめにかけて行けど  
 怨みす仰いで天を慕ひ  
 かよわき董の笑みて立つよ

髭ある人の子書を讀んで  
あさまし利慾の關をはなれぬ

これ化菩薩か、むらさきに  
春の日薫じて雲どなびき  
藤花七尺人を戀ひて  
ただちに穢界の土に降る

骨ある人子歌に狂し  
くちをし 末世の娑婆を救はぬ

飛ばんか胡蝶いざや飛べ

せばしと云ふな四つの羽は  
能く天地を負ふに堪へて  
すなはち無何有の國に遊ぶ

なれたるさかしら、夢に比して  
胡蝶の神通人は會せず

狂ふか若駒さらば狂へ  
なんちが蹄の轟く處  
雄力あるかな久遠劫の  
寂寞やぶれて呼吸を生ず

な  
に  
た  
る  
銷沈せん、  
鞭むちを  
に  
ぎ  
る  
勇  
者  
の  
人  
の  
子  
今  
は  
眠  
れ  
り

盆 祭

(卅一年の秋の作)

玉  
や  
は  
ら  
か  
き  
手  
を  
の  
べ  
て  
西  
瓜せいの  
紅こうは  
そ  
め  
な  
が  
ら  
ま  
だ  
あ  
ま  
か  
ら  
ぬ  
恨  
み  
か  
な  
足  
ら  
は  
ぬ  
が  
ち  
の  
田舎ゐなに  
て

供  
へ  
ま  
つ  
ら  
ん  
物  
も  
な  
し  
母  
な  
き  
子  
に  
は  
陽曆やうりきの  
盆  
こ  
ろ  
い  
と  
い  
か  
な  
し  
け  
れ

い  
ざ  
や  
い  
も  
う  
と  
湯  
上  
り  
に  
こ  
よ  
ひ  
ば  
か  
り  
は  
化粧けいざうし  
て  
時とき繪えの  
櫛くしの  
お  
と  
な  
し  
く  
鬢びんの  
ほ  
つ  
れ  
を  
か  
き  
あ  
げ  
よ

香かうの  
け  
む  
り  
に  
打  
の  
り  
て  
ほ  
と  
け  
は  
今  
か  
來  
ま  
す  
ら  
ん  
軒  
端  
の  
し  
の  
ぶ  
風  
み  
ぬ  
て

燈籠の火のゆらぐかな

兄はいかなる顔あげて  
こよひほどけを見まつらん  
思へばまたもこの三とせ  
あらぬ名のみぞ留めたる

もとより人のあやまりを  
いひ解くみちは知りながら  
運命つたなき人の子は  
世にさからはん力なし

酒にわらひてのがるれば  
もの狂へるわれどいひ  
戀にやつれてわすれれば  
痴れはてたるわれどいふ

胸のうらはふ瀧つせの  
はげしき涙せきあへず  
腹だくしきやくやしとの  
このわづらひを誰か知る

あゝ忘れてはいくたびか  
よわきなきけに返りつゝ

十とせ誓へるますらすの  
願ひもあたらうちすてゝ

かねてこの世に木屑まがせど

くちぎたなくも罵れる

法師の身にてわれもまた

朽ちばやとさへ思ひしよ

子のおひさきは親ぞ知る

世に耻おほきわが子よと

いさめたまひしみことばの

今こそ身にはしみわたれ

ほとけのまへに懺悔する

こよひの我はまことにて

世にしたらがはぬすねものゝ

いつもの我はいつはりか

世にしたがはぬすねものゝ

いつもの我や假面かめんにて

まづしきに泣き飢に泣く

けふの我身やたゞしきか

あゝわが胸は三日月の

ゆふべの雲におほはれて  
わが身は長きみだれ藻の  
水にたゞよふなげきかな

われをなぐさめ勵まする  
ひとりの友はありじかど  
黄金こがねのまへのあらしひに  
見捨てゝいにまあさまし

なさけこもれる初花の  
きよき小女こななもありしかど  
我にはをしきなみだどて

そむきはてたる悲しさよ

たれにか問はん我こゝろ  
たれにか告げん我なやみ  
あゝ今こそはしものばるれ  
母のほどけのいさめごと

「わが子よ山にのぼりなば  
けはしき坂をとくなかれ

わが子よ淵にくたりなば  
うかぶ瀬もなく沈めかし

人をすくはば活かすべく  
ろのてのひらに玉を盛れ

人をのろはば殺すべく  
そのふどころに蛇を伏せよ

西にゆくべくゆきぬすば  
わが子のゆくは東なり

わかきうばらどにははすば  
わが子の胸は巖石なり

筆にはとせめたまはねせ  
世をさりたまふいまはまで  
いさめたまへるみことばを  
寫せばやがてこれなりき

ほどけよいかに告げたまへ  
いもらど如何にかたれかし  
きのふも今日もあすの日も  
わが立つみちはいづこそや  
けはしき坂をゆきかねて

ろこなき淵に入らんとし  
玉をば手よりなげすてて  
蛇をふどころに伏せんとす

かなしきかなや月の入る  
西にはゆかぬわが身なり  
うれたきかなやばらの香を  
胸には知らぬわが身なり

われまよへるか狂へるか  
われさどれるかただしきか  
人には問はじみそなはす

ほとけぞ獨り知りまさん

あゝあゝ愛しいもらどよ  
ろなたまでこそ泣かせしか  
いざ顔わげよわが袖に  
あつき涙をのこはばや

はかなきわれの述懐に  
泣きたまふこそ嬉しけれ  
ろなたにあらで誰かまた  
さばかり我にやさしかるべき



漢城對酒

ころもは薄し秋さむし  
高樓にまた酒を喚ぶ  
北漢の山あゝ雄なるかな  
わが霸氣いかに  
なほこの山を抜きかぬる  
漢江の水あゝ清いかな  
君が愁ひいかに  
いまこの水と長からむ  
笛をとりて吹く

美人かぎりなきの恨うらみ  
劍をとりて舞ふ  
壯士たへがたきの情  
涙はみつ景福の宮みや  
草荒れて時雨ふる

芋魁集

三十一年十二月浦鹽斯德にありて

またぎても踰ゆべき海の北のかた他ひ  
人の國あり浦鹽斯德

西邊<sup>レ</sup>利亞<sup>ハ</sup>の朝北<sup>ニ</sup>おろし海に入りて氷  
となりぬ浦<sup>ニ</sup>鹽斯德

元山港にて某の爲めに

左手<sup>ニ</sup>に血に染む頭<sup>ハ</sup>七つ提<sup>テ</sup>げて酒の  
みをれば君召すと云ふ

朝鮮海にて漁業を見て作る。時に本國密偵の  
予を物色する頗る急なり。

あらしをわのが家なる鯨さへ危し世  
には網といふもの

赤間關の藤本樓に飲みて

まことあはれ妾は花よ君は水ながれ  
て去年の影はかへらず

顔をあげよかでん屋臺<sup>ニ</sup>に夜立つ子寒  
しや我も酒のさめし後

藤本生と東京の街上に飯む

うらうらと山の日かすむ苔の戸に白  
き雄鹿の花<sup>ヲ</sup>啣みくる

紀伊客中

たかのやま石楠<sup>ノ</sup>かをる有明にしだり  
尾しろき鳥のひと聲

谷中

新墓<sup>ノ</sup>卒都婆の上に鴉ゐて紅き梅ち  
る有明の月

韓國親王完平君の邸にて

燭あかし樓蘭の曲破になりて殿の牡  
丹つらうちゆらぎたる

再び藤本生と飲む

新坂の白馬うまし雪の日を一貫五百  
わが願ひ足る

京城元旦

元日や東門を出でて鶴を見る詩人顔  
玉の如し竹の冠す

木幡街道にて

風さむき伏見の山のうすづき夜竹の  
葉まじりにしら梅のちる

島田姿のよくもふさへる子のみまかりければ

花にしもかねてよそへる君ながら送  
らんものか青き苔のもと

醉茗に復す

末の世に小生ありとほこるべき我歌  
いまだ成らずもあるかな

高松に着る時

青海に春日かざろひ繪のごとき高松  
の城桃の花さく

歌集大和錦を讀みて

襪なすこの歌巻にひとすぢのこが  
ねの絲や竹の里人

志貴山中

うすれゆく杉間の月に梅ちりて奥の  
院さむし狐なくこゑ  
神杉のこずゑゆらぎて山かせに天狗  
くる夜の月ふけわたる

木屋街に宿して

更けし夜の火かげ花かげ霧に似て四  
條河原に笛のおとする

大友生を訪ふ

君がすむかごはまよはず上根岸あか  
き櫻のひともと咲く家

駒込に住みける時

山吹にこさめそぼふる垣根道くるま  
とどめて女もの問ふ  
植木屋の因業爺がまなむすめ二十五  
と云ふに猶雛をまつる

洛東僑居

梅の歌ありやと叩く友もなし獨り雨  
に閉つ竹ふかき門  
若尼の筆のすさびに泣かれけり世を  
すててのち花を惜む歌

丹波道中

苦あをき山の岨道雨はれて鳩なく朝  
を桃の花ちる

馬の脊に春日うらうらねむけさす時  
の道はぼけの花ざかり

百十八

二十日あまうしろき梅さく山にねて  
あまたになりぬ人戀ふる歌

わが歌に君がなさけをにははせてく  
らべてみばやしら梅の花

いつしかも鶴にまじりてくだりけり  
梅が香さむき月が瀬の山

菜の花のにはへる里にひどもどの紅  
きすももや妹が家のかど

白き羽のかりがねわたるこちして  
玉の琴柱を見ればあはれなり

梅の雪ふかさ七尺おほかみのわたる  
尾上に風をきくかな

妙義の山太古の石ぞ我を嗤ふ飛ぶに  
羽なし瘦せたる男

任はてて歸る總督うらやまし人を殺  
して君が名なりぬ

百十九

雀の賦

(童謡十篇の一、三十三年元日作)

ちう、ちう、ちう、ちう、ちう、あらめでた  
けふは元日あらめでた  
せれせれ一族うちつれて  
日あたりのよい臺町の  
博士の家のみなみ窓の  
はころびかけた紅梅の  
大木のえだに謡はうよ

「むかしのむかしの大むかし  
わしらが先祖は利發もの  
博士の家に巢をくうて  
つハ朝夕のきゝおぼね  
文選一冊よんでのけた」  
ちう、ちう、ちう、ちう、あらめでた  
けふは元日あらめでた

あれさ窓から覗いて見なよ  
わかい博士の三人四人  
屠蘇の機嫌か調子も高う  
何をか説きやる未來ちや過去ちや

は、あ成るほど噂に聞いた  
二十世紀は今日からか

さても笑止や生ものしりに

大きな過去が解からうか

け長い未来が解からうか

ものゝためしに聞いてもみたい

博士の壽命はなあにほど

博士の知識はどられほど

二十世紀が泣きやせぬか

わしらもどより理窟が嫌ひ

お見やれ理窟が何になる

戦争がなくては立たぬ國

米が無くては生きぬ人

恩、禽獸に何とやら

ほざいた口でお、怖や

チキンカツレットしやぶるげな

ちう、ちう、ちう、ちう、あらめであ

けふは元日あらめでた

上野のお山を一つ越ぬ

根岸の老爺を訪うて見よ

おやちなつかし理窟を言はず

うらののはたけに芋や豆うるて  
今年らくらく正月むかへ  
孫を相手に日向の庭で  
雀来いちふて米を撒く

豊 臣 秀 吉

(某唱歌集の爲に作る)

天の日月のふどころへ  
入るよと驚くま夢に  
このきみ長く口のもとの  
武勇の光りどかがやけり

あゝいさましや藤吉が  
草履とりたるてのひらに  
きのふは大將けふは關白  
あめが下をばもてあそぶ

大兵百萬をこえ  
ひさごの馬標敵はなく  
支那朝鮮の山の木も  
秀吉の名にそのきぬ  
壯心中途にたがへども



豊國廟にくらぶれば  
君がしたしく春をうちし  
頼朝の墓は小さなり

埼玉の氷川神社に詣でて人々と花のもとにて

むらさきの組緒ゆらゆら花笠の紅き  
がなかに頬髭ある人  
散る花を踏むが惜とさに一めぐりめ  
ぐりてやみぬ神のみやしる  
花かげに炭の火吹きて茶碗やきて詩  
をかき書をかく山田寒山  
花の宴狩衣させぬうらみかな信綱の

大人羽衣の大人  
わが強ひし歌の半をかきさして咲子  
の御手洗のさゞれに下りし一むらの鳩  
の白羽に花ちりかゝる  
女児を挙げし時  
朝顔に秋の水くみ松の葉や桐の葉た  
きて子の初湯する  
髭うすき三十男子をうめばやがて親  
とや家もあらずに  
ひと月ばかりありてみまかりければ  
はゝるみて死ぬるかあはれ世の中に

饑ゑても親は生きんと思ふに  
 ひぐるまの瘦せてさびしき夕かげに  
 我見も西を志すらん  
 死出の山くらさあなたに誰を喚ぶ親  
 の名も知らず己が名も知らず  
 白き芙蓉あかさ芙蓉とかさなりて見  
 のゆく空に秋の雨ふる  
 秀でたる人にどこそは祈りけれ佛の  
 身にもなりにけるかな  
 わがふたおやの亡くなりしも秋なりさ  
 梧の葉のおちてはたまる山の巖にわ  
 が親も入りぬ子も入りにけり

懊 惱

老いたる友

をぼふる窓に書を讀めば  
 船山が詩の悲しきや  
 見よ歌ひてはふるさを  
 戀ふる涙のあつき哉

げに功名は何者予  
 少年の血を激しては  
 南船北馬徒らに

黄金を盡し身を破る

あゝくづれたる裏長屋

糸車ひく親子にも

乾鮭焼きて團樂の

樂しき酒はくむぞかし

兄弟五人いつどころ

別れて何を苦むや

十とせが程よいく度か

共に手を取り語りたる

石冷かに苦ふりて  
掃ふ人なき山里の  
御親の墓を忍ばずや  
あゝ君も亦誤れる哉

若き友

老いたる人の繰言に  
耳傾くる事なかれ  
なぞ書をよみし若者の  
るの悲みを知らざらん

孔雀に清き羽なくば  
牡丹の花に下らんや  
秀でし才のあればこそ  
人は譽を願ふなれ

三十にして名をば揚げ  
四十にして予山に入る  
鬢に白髪を生ひざらば  
英雄死すとも悔あらじ  
げに心地よき船山の  
この句を吾はとらん哉

夜半の劔に光なきも  
たけき男の子に希望あり

谷を出でたる蘭の香の  
高きたぐひを君見ずや  
花なき草のそれならば  
霜ふる山にさもあらばあれ

若もの

一 劍天下の志  
唯夫れ書生の壯語とや

嗚呼うらやまし恥なくて  
パイロン早く死にたりき

あつき血汐に年頃を  
わき立つ願ひいく歸り  
婿を放れし若駒の  
おさへがたなきむら心

支那朝鮮や露の境  
人いくたりの血を賭けて  
吾運拙く破れては  
四たび追はれてかへりけり

時をも身をも怨みては  
愚かにも又迷ふかな  
悲しからずやおのが詩を  
市に抱きて獨泣く

老いたる友よありがたき  
君が諫にたゆたひぬ  
心の友よ勇しき  
君が言葉をばたいかにせん

三人旅

(三十一年五月作)

與謝野

「あゝ飯島よあゝ和田よ」  
 ふたりの友の名をよべば  
 先づ胸の血のわきあがり  
 あつき涙のおつるかな  
 和田  
 あゝ飯島よあゝ和田よ  
 あゝ與謝野よとよぶしたに  
 われらみたりの交りの

こもれるこころ誰か知る

飯島

うれしきことを聴けるかな  
 をどこのなかのをどこぞと  
 たがひに名をば惜むこそ  
 げにや我らのいのちなれ

與謝野

うすむらさきやこむらさき  
 からくれなむや白百合や  
 人の花なるをどめむに  
 泣きつくくしたる和田の君

なさけの霧の彩色いろどに  
高嶺のすがたつつまれて  
人に知られぬまごころを  
われころなげけ和田の君

和田

火を踏み水にをどり入り  
やむにやまれぬ俠氣あつぎの  
五尺のからだ血ちに熱あつる  
飯島與謝野兄あに二人ふたり  
こどばは多くわざは稀れ  
いひ甲斐もなき我なるを

どちどちに溺れん焚けんどは  
世にありがたき兄ふたり

飯島

蝶は枯れてもいろいろの  
にほへる羽に香をのこし  
蠶か見は死しにてひかりある  
たふとき帛いとに彩あざとせむ  
いかに惜めよ惜まずや  
男はまたも名のほかに  
あゝ名のほかに何かまた  
かばねの土をかざるべき

與謝野

きよきを云へば夏山の  
いづみにひたす星かけか  
高きを云へば秋予らの  
あらしにさゆる雁がねか

和田

なさを云へば春の野の  
かすみの花のゑむとどく  
すがたを云へば冬の海の  
うしほに鷺の舞ふとどく

飯島

よしあらうふも一しきり  
夕立すさふいかつちに  
裂かれて折るる大木木の  
跡こころよきまじはりや

與謝野

さてもわが友酔ひざめの  
眼をくろくしてつらつらに  
個人と社會の乖きたる  
ふかきなげきを想ひみよ



あゝ泣くべきに泣きかぬて  
はらだたしき打わらふ  
はばかり多きいまの世の  
よわたりこそは苦しけれ

和田

言葉の上に春秋の  
花をきざみて香はせて  
思はず人をねぶらする  
秀でし才の悉ろしや

若き小鳥の自から

花の色香にあくがれて  
あざむかれつゝ籠に入る  
直き生れの愚かさよ

飯島

ひと鞭うたばアルブスも  
躍りて越ねん蹄もて  
野に繫がるゝ若駒の  
はがゆき人の我等かな

雲紫に朝日さす  
彼方の空に一すぢの

望の山ハ見ぬなから  
猶煩ひの羈絆あり

與謝野

あゝ何故に書を讀みし  
裸形むだりかたのまゝの身なりせば  
椰子の葉陰に樂しくも  
夏のなやみを忘れんに

和田

あゝ何故に名は知りし  
世に求めすば戀に泣き

酒に狂ひてをかしくも  
このわづらひを逃れんに

飯島

悲しき事を云ふ勿れ  
名を惜ますば世の坂に  
何ひつまじく手をとらむ  
やすく樂しき死の淵へ  
早くゆくべき吾等ならずや

荊叢毒蓋

(卅二年八月作)

嵯峨に籠ること五十餘日

山の井に瘦せしわが頬をうつしては  
あさまし人を猶うらみける

峨山老師に參じて後

ねぞろかす君いかづちの聲しなくば  
心の巖よいつか眼あかん

萬松洞に臥して

わが世をば思ひ得ぬこそくるしけれ

山は風して松の花ちる

獅子巖

わが歌を月にうたへば風出でて吼え  
んとすなり獅子の大巖

書物巖

誰がひめしいはほのなかのふるふみ  
ぞ尊し筆の今の世に似ぬ

子規は意がらとて夜毎にきゝふるし  
たり

ほととぎす大竹藪をよこぎりぬ去來  
が庵の月を見にゆかむ

舟を嵐峽に泛ぶること連日

船よせて手あらふほどの涼しさよ松  
の影さす大巖のもと  
君が手の京の扇にこぼれけり見あぐ  
る崖の岩つつじの花

見さしたる夢はわが世のものならず  
月こそわたれしら蓮の花  
露おくやその朝月夜わすられず妹が  
垣根のしろばらの花  
鳶の花の白きをだにも棄てかねつお  
のがなさけよなごか然はもろき

二尊院に詣でて元信の筆を觀たり

ひるねにはあまりに伽の多きかな彌  
陀釋迦二尊二十五菩薩

三友樓上所見

岩に立ち衣あらふ子の神々し水むら  
さきに入日さす時

天龍寺中

石の上に達摩をすゑて浴衣させて蚊  
遣して見る松の葉の月

河村國手の扇に

しら蓮の花かげ晝の月みえて清しや  
妹が解き洗ひ髪

斷霞

(三十年五月作)

その一

君がひたひのけだかさば  
青海原の沖なかに  
低くうかべる雲と見え  
舞ひ立つ鶴のすがたあり  
君がまなこの涼しさは  
細谷川のみなごこに  
浅くしづめる玉と見わた

かがやく星のふせいあり

その二

春のやまべの花の木に  
にはひてなびく夕がすみ  
たぐへてましや羞らひて  
半ろむけし君が頬に  
秋の河邊の蘆の葉に  
低くくだれる天の雁  
たぐへてましや物思ひて  
軽く鑑めし君が眉に

その三

夏のみやまの巖かどに  
夕立すぎし蔦の葉の  
たぐらば指も染みぬべき  
あゝあゝつやある黒髪や  
冬のゐなかの柴垣に  
朝霜きえし山茶花の  
吸ひなば舌もかざるべき  
あゝあゝもゆる唇や

その四

くろ髪優に塵もすゑす

その五

垂れし金糸のゆらゆらと  
平打はなに玉ぼりのゆらと  
三羽の鶴を根は銀に  
やの字むすびの品たかく  
もめし繻珍のきらきらと  
帯止はなに寶石いりの  
雌龍雄龍をこねにて

心のいろをつつみたる  
ゆかし小袖の紅絹の裏よ  
燃ゆるなばかをる梅が枝の

雪のはだへのとけやせん  
物のあはれをあつめたる  
いちらし襟のむらさきよ  
いぢれなば繡へる薔薇の花の  
露のなさけやこぼるらむ

その六

花のあたりに君な行きそ  
錦の袖のゆらぐとき  
蘭のかをりにほだされて  
命ちぢむる蝶あらむ  
水のはどりに君な立ちろ

海老茶の傘のうつるとき  
指なる玉にあくがれて  
わが身わするる魚あらむ

その七

窓掛あけて椅子すゑて  
青磁の瓶の花もど  
びやのの絃のやさしきに  
あゝ清いかな甲のこゑ  
あゝ清いかな甲のこゑ  
そのこゑ歌にさゆるとき  
あゝもふかな如何ばかり

ほどけも鬼も泣きぬべき

その八

まきゑのすすり唐墨の  
にほひ紅ならぬ卓の上  
かけたる紗のむらさきに  
あゝ清いかな細き手の  
あゝ清いかな細き手の  
ろの手に筆ののぼるとき  
あゝかもふかな如何ばかり  
ことばも墨もうるはしき

その九

雨のゆふべは如何にして  
君いますらん奥どのに  
このつれづれをなぐさむる  
てのつれづれをなぐさむる  
手筈に反古のなつかしら  
物のあはれを知りて  
鏡をかくる胸の上に  
愁の雲のかげさすも  
かほくは雨のゆふべなり

その十

月のゆふべは如何にして



君いませらん奥色のに  
このしづけさを盡したる  
草紙に歌のいみじくも  
世のさびしさを知りそめて  
霞をたゝむ袖の上に  
なみだの露のやどかるも  
おほくは月のゆふべなり

その十一

野に花束はなたばをもとめては  
いとしと名なき草をすら  
あはれ一たび君が手に

ふれにし草のうらやまし  
路に車をとどめては  
惜しやとちりし花をすら  
あはれ一たび君が眼に  
入りにし花のねたましき

その十二

あゝ草ならば野に生ひて  
ひとたび君が花かごに  
あゝあゝ我をいかにせん  
草にも劣る名なき身の  
あゝ花ならば路にちりて

ひとたび君がをぐるまに  
あゝあゝ我をいかにせん  
花にも劣るはくめいの

その十三

三とせをおなじ師のもとへ  
つぎゆきはなの歌くわいに  
一重の伊豫籠めには見えて  
かけはなれたるわが戀や  
かけはなれたるわが戀や  
心なぐさによみいでし  
この歌をすらはばかりの

あゝ何として君が手へ

漢城雜詩

(卅年の秋より冬へかけての作)

鹽川一太郎の松泉亭を訪ひて

罵りし口もあらはん君が山の松の下  
ゆく水のあまきに  
藻の花を分けてむすべは巖間より晝  
の月しろく浮きて流るる  
酒徒間利子某と南大門外に遊ぶ  
わが立てるすがたもさびし秋くさに

入日うすれて小雨ふりきぬ

槐園と賦す

人はいざ戀ともいへよたまくらにた  
ばしる涙ひとり知るらむ  
萩の葉にまたも身にしむ風なれや十  
とせを旅の衣きぬうすくして

泥岨の歌妓某に與ふ

やは肌の雪にはほへる紅絹ものうらの  
下にしこがれて云はぬ君かな

一太田槐園諸友と歌妓數輩を拉して

南山の老人亭に飲む

世をかこつ身にはあらねど君ゆゑに

ひと日くらしつ山かげにして

よき山やつひに我世の甲斐なくば君

とともにものがるべきかな

人の南溟山へ月見に行けるを憶

からからと笑へば松の月はれて我立

起つ峯たかねに鶴の群むらなく

東京なる吉小神秋冬のもとへ

から日本にっぽんかなじこゝろにあらずとも

この秋風は君も聽くらむ

菊池長風と話す

からびどのすすむる酒はうすけれど  
ひと夜を旅のものがたりせん

かへりこぬ國のなげきを思ふかな暮  
れゆく秋はさもあらばあれ  
みだれたる國もすくはばすくふべし  
いかで我名を戀にくださん  
四たびわれからのみやこをおどづれ  
て國のなげきの數つくしける

九月二日は亡き母の一週年祭なり

おもひきやからの荒野の秋くさを摘  
みてことしの手向せんとは  
から山の松のしたみづむすびあげて  
佛の御名を先づぞ稱ふる  
たてまつる花にも母はみほどけの姿

になりて降りますらむ

師のみもとへまゐらせたる中に

からにして誰にか見せん秋かせの歌  
は多くもなりにけるかな  
この秋は松のしづくやまざるらむか  
もひまゐらする涙まじれり(師の庭に松多し)

槐園海觀一人と飲む

庭燎庭燎たきさゆる霜夜に三人三人してから  
のをとめの歌をきくかな  
はちらひて月にろむけしくれなるの  
頬のにはほひこそ身にはしみぬれ

小題大做

(廿九年の作)

○ 江上吟

霞あをき山たろがれて  
くれなるの橋小雨ふる  
柳の絲はむすべども  
つなぐよしなし妹が酒船

女ごころ

じれて怨んで死んだる後を  
何になるぞと男に聞けば  
せずには置くまい此腹いせを  
おいら死んだら鳴神さまよ  
七十五日を荒れて荒れ通し  
焼いて呉れう予世の中の戀

泣いて悔んで死んだる後を  
何になるぞと女に聞けば  
わたしや矢張り女にうまれ  
丸尺間口のうらだな女房  
氣兼苦勞で添ふたる主と

さ一度泣きたや世の中の義理

◎ 七里が濱

ゆふべの汐のさすままに  
いづこそ二人ならびしは  
眞砂の上なきぬ靴の  
跡はかなくぬがき消ぬぬ

月あかあかと千鳥なく  
七里が濱を秋の夜に  
船はらん身のきらひとて  
磯つたひつつ江の島へ

長 刀

酒はうまかが酔うたら醒める  
花はよかけを咲いたら散らう  
腰に朱鞆のわざもの五尺  
此がよか相手おいとんの

今様詩人

天才よ狂熱と  
賣薬の名には聞き飽いた  
さても先生薬籠の底に  
丸くひかるは那箇の薬

これかこれか  
譯して實はうぬぼれの  
えいと原語は忘れてそる

小頃

土手の月夜に黒い影が見ゆる  
あれはあれはさ  
あれは小唄のぬしの影  
あれあれあのよいあのよい聲が  
竹さんで無うて  
里の若い衆に又あるか  
今はお嫁の姉さんが

聽いてお泣きやる川向に

銷魂錄

(廿九年九月作)

李彰烈、人となり慷慨沈痛、智謀に富み、古烈士の風あり。曾て趙淵君を助けて、それが十年の幕僚たりき。その春、國王還宮事件の疑獄起るや、李、實にその主謀を以て目せられ、逃れて東京に赴けり。われふいに四たび漢城に入りて、居る李の宅に借りぬ。李の事撃みな忠實、日夕わがために薪水の勞を取り、毫も厭倦の色なし。所感五首を録す。

家刀自よいたくなわびろやまどにて  
相見し人はつつがなかりき

ともすれば國をわすれてあさましく  
子らを憶ふと君の泣きける  
くやしきもはかりしことはたがひけ  
んおなじ恨を我もいくたび  
るにしありて刀自のなげきをききに  
けり我身もあすは如何になるらむ  
世をなげく人の妻こそかなしけれ幾  
たびかかると生き別れする

### 景福怨

(韓國王妃殞後三年の秋に作る)

むらさきもあけもにほひし韓くにの  
玉のうてなは秋の風吹く  
いくとせかたなは枕にききなれてさ  
いしど雨をとおぼさざりけん  
妖あしと棟木のうにさめざめと泣き  
つありの夜は明けにけり  
廻廊の血潮のなごり今もきえずちさ  
さ御足の痕ぞにはへる



大庭にすてたるかばね土となりて今  
さかりなり秋くさの花  
みくるまはいまだかへらずこの秋も  
御階の柳ひとりこぼるる

小百合

(三十年の夏の作)

物も云ひまじよか顔も見やう  
すつとお寄りな垣の根  
内へ入れたいは山々なれど  
この垣一重が世の隔

あれ風が吹く夕風が  
よけてお立ちよ小百合の花を  
花がそよげば露が散る  
新裁の浴衣が濡れうろえ  
思ひ止て止てど  
云ふたは愚痴か浅はかな  
行かしまんせとめはせぬ  
遠い他國の眞珠採り  
暑い日中に「郵便」と  
村の街道でお前の聲

わたしやきく度きく度に  
まあどの様に此胸が

ろれにお前のおとなしう  
さからはぬ氣の率直さに  
世間で市は人よしと  
あの蔭口が憎くらしい

村長さんのおはなしに  
親のないのが不幸の一  
財産のないがろの次と  
いつやら聴いたも道理な

あの母さんがお在なら  
十四で役場の小使に  
十九で郵便配達の  
かうした苦勞も無からうに

あの信さんも人よしなれど  
財産ありやこそ皆の衆が  
旦那々々と辭儀するに  
貧にうまれて身が低くや  
けさ髪結の通さんが

それと知らねばお前の噂  
「配達」の市の甲斐性なし  
村の若い衆が嗤ふてる

いつ行くことかオウストラリヤ

噂ばかりで噂あかぬ

男は度胸が第一さ

ねい系ちやんと聞いた時

わたしや思ふた女の愚痴で

なせに止めたか今日迄に

嗚呼わるかつた止めはせぬ

早う立たせて上たいと

あゝ市さん市さん悲しいけれど

わしや泣かぬぞ此別れ

行かしたんせ行かしたんせ

わしやなんぼでも待ッてゐる

鎮守の森の掛茶屋に

氷よ菓子よ火よ煙草

客へ愛想のつとめちやとて

お前ゆゑなら厭やせぬ

\* \* \* \* \*

鎮守は他所へ移されて  
残るは敗れた小屋一つ  
むかし垣の跡らしい  
ろこに年々百合が咲く

今も駄菓子店だして  
老婆さんひとり小屋の中  
白髪あたまに紅いのかけて  
まだ結ふてゐる蝶々髷

折々きては村の児が  
お婆さんお嫁にいつ行くの

問はれて老婆は機嫌よく  
「あの市さんが歸ッたら」

あの市さんが歸ッたら  
歸ッたらとて七十を  
今また二つ市さんは  
なせに歸りが遅いやら

### 袖の霜

父ぎみ、去年の秋より、周防國徳山なる兄君のもとに下りい  
ませるか、春よりのおん病、この秋になりてあつしく成り給

へり、とく下り來よとたよりあり。

ほだしある世につながれてれもふま

ゝ親のやまひもとはれざりけり

八月十日、京に歸りて、十五日に一の兄君と打つれて下りぬ。

おん病のけにや、いとも衰へたまへれど、おん心は例のたしかにおはします。されど、みとれる醫師のいふをさけば、今宵にも危しとなり。

きりの葉のひと葉ちりける朝風に胸

さわぎしやまことなりけん

十六日の夕つ方、すわらまほし、おこせよとあるに、後ろより抱きまつれば、ぬすまひ正しくしたまひて、辭世の歌五首ばかり詠み給ひて、臥し給へり。さて子等にもわかれの歌さ

かせよどのたまふに、一の兄君、なくくも「もろどもに佛の道をよろこびて後の世までも親子とや云はん」次の兄君も、うるみぞ急になりて「親といひ子と云ふも世のかり名にて入我々入のさとりたのもも」ときこえ給へば、げにも樂しきちぎりかなと打笑み給ふ。我れも胸せまりて今は涙さへ出でず。

親といへばなほ人の世のわかれなり

復あひがたき佛とぞ思ふ

ろの夜の十時すぎし頃、わが手をひしと執り給ひて「かわいや」とばかりのたまひしが、やがて氣色次第にかはりて、夢ごこちにておはすめり。

あなかしこいまはの空も我のみや心

の月のくまとなりけん  
ひと言のいまはのきはのみなさは  
わが千ことにもいはれざりけり

十七日の午前二時十分といふに、火を少しあかくせよとのたまへる程もなく、やすくと眠り給ふやうにて果て給ひぬ。

ほほゑみてねたまふ見れば紫の雲の  
ゆくてやのどけかるらむ  
世の中に親なき人のさびしさをけふ  
は我身になげかるゝかな  
そこそとも魂の行方を知るべくばつ  
るぎの山も踏みて行かばや

晝の午の刻すぎて、柩にをさめまつらんとて、法のころもを

着せまつれり。

させまつる法のまごころも彌陀たのむ  
ひとへと見れば嬉しかりけり  
釘うちつけんとて、一の兄君、光明真言うちずんじつゝ、土  
砂加持をふりかけ給ふ。

みほとけのさよさひかりよ死出の山  
かちゆく人にさはりあらずな

この里の大成寺の上人より「心や、打どけたりしほどもなく  
歸らぬ旅に君はゆきけん」と、よみておこせ給へり。返し、  
知る人の世にあるほを思ひ出には  
ほゑみてこそ親はいにけれ

十九日、はふむりの式はて、茶毘しまつるほを、所の名を

きけば、鬼がしらといふ。

あさましく周防の國の鬼といふ野邊  
のけふりになりませるかな  
ひと口に喰ひてやいにし谷の名を鬼  
ときくだに悲しかりけり  
わすれてはおのがつけたる野邊の火  
をあはれとばかり拂ひつるかな

遺稿のおん歌ををろがみて、

かたじけなやまひのどこに子を思ふと  
かきたまひしがあまたあるかな

この里の人々へ、さきく、形見にとておくるべき短冊、きぬ、調度など、姉君の分け給ふに、いまはのきはまで、み枕

なる、ふとやかなる瓶に、萩の花もいけさせてめでたまひ  
つ、「花といへば身の終るまでなぐさみぬ來ん世のかをりお  
もかげにして」と辞世にも遊ばせしとなど、思ひあはせて、

みまくらにめでたまひつる萩の花な  
れにも歌のかたみどらせむ

二十日の朝、おん遺骨をさへげて、山陽鐵道をのぼる。

世にまさばともにもみやじま吉備津よ  
どうれしき瀧車の旅路ならまし

岡山をすぐるほど、窓より、操山のふもと、瓶井みづののあたりを  
打みやるに、一とせ打つれて下りしことなど、さながらさきの  
ふのやうなり。

松かけに百首歌してともに見し瓶井みづの

の月はいまもすむらむ

この國に名だたる臥龍の松は、一たび見たまひしことあり。

いたづらにねむるすがたの松にのみ

千とせのよはひたがゆるしけん

はやも、五日の夜になりぬ。

かすふればよゝをへだててあはん世

もいつよとけふは悲しかりけり

をしへ子なりし愚庵禪師より、萩の花にそへて「もろどもに

見んと契りし」などとふらひ給ふ。いと悲し。さはいへ、

ふるさとのもと原の小萩もとの身の

はとけになりて見そなはすらん

また、禪師へ、父君より、海松の鹽漬といふものおくり給ひ

けるに、その品の、とせかぬさきに。なきかすに入り給ひし

よしのたより、うけたまはりぬなど、かさうへ給へり。

ながみるのながきなげきにひかるべ

きものど知りてはおくらざりけん

二十九日、けふ三七日といふに、あらためて葬りの儀式す。

みおくりを給ひし人々のなかに、宇田淵、近藤芳介、赤松祐

以、毘尼薩台巖、猪熊夏樹、富岡百鍊など、名だたる歌びと

あまたあり。

うたびどの知れるかざりに送られて

かなしきけふも笑みておはさむ

わが師のきみとは、相知らぬなかなりしかど、中國へ遊び給

ひし歸るさに、立寄りてとふらひ給へる、いとかたじけな



し。

身にあまる教の親のみなさけはうみの親にも今かゝるかな

ひがしやま大谷の墓にをさめまつりぬ。

花もみぢにはふ土よりなれる山の

ひがしの山にいざねむりませ

まづまれる歌のみたまやまもるらむ

尾上のさくら峰のもみぢ葉

赤松祐以翁「この世にはまたすまじとて與謝の海やわまの橋立よちのぼりけん」とおこせ給へり。この翁とは、分きて睦じき歌がたきにて、共に奈良の葉の昔を慕ひ給へるなかなりけり。

世の歌のふたたびすたる折もあらば  
天の橋立またくだりませ

九月二日は亡き母の三とせの忌なり。けふ、み墓のいしふみたてたり。

母まつる三とせの秋に父もまたまつ

る我身となりけるかな

おもひさやさびしき山の岩かどに親

のみ名をもゑりつけんとは

歌の中山清閑寺にこもりをるに、風ひきたるこゝらにて、山をも下らず、今は形見とされる青銅の鏡、水晶の珠數など、打見ると涙なり。

なき親のかたみと思へばいまさらに

秋の風にもあてじどろ思ふ  
家にあるますみの鏡われならでうつ  
さん人はなくなりけり  
世にのこる珠のかすくくりかへし  
きよきみこゑを聴くよしもがな  
はかなしとたどへし露は草の葉にま  
たれきかへる朝もありけり  
かくてわれみはかの霜をはらひつゝ  
苔のたもと朽ちもはてばや

この歌の中山に移りたまひしほど、我れへの文の中に「老は  
たわわが子の上をいのるかなまことにかへせ歌の中山」と示  
し給ひしは、我歌の近き年ころ、餘りに突飛なるをあやぶみ

給ひつるにこそと、今更にかたじけなければ、此み寺の壁に  
書きつけける。

わがために千とせの名をや祈りけん  
世をおどろかす歌の中山

世に筆とり給ふわざの人々、父が一生の履歴させよと云ひ  
送らるゝに、かわてろの筋へさこえあげたる傳記のあらまし  
をぬさがさしていらへす。

墨染ののりのたもとをいくたびも世  
をつつひとて裂きたまひけん  
おほかたの歌にひとふしかはりしは  
はとけごゝろの多かりし夫れ  
いもうどのもとより文のはしに「父ぎみにたもとひかれて拾

ひてし嵯峨山もみぢ今かろむらむ」と見ゆ。いとあはれなれば、返し。

手をとりて着せまつるべき親はなし

紅葉の錦こぞに似たれど

十月九日、み墓に詣でて、菊の花をたてまつる。今そなへたる柿の實を、やがて鴉のもちされるなん、とふ人もなかるべき、ささぐの世もおもはれて、いとかなしきや。

あら菊にいのりし千代もあだにして

手向くる花となりけるかな

おくつきにからすおりるてもものぞ食

む荒れなばいかに野らとなるらむ

(明治卅一年十月十七日記)

### 出頭 没頭

(卅年十一月作)

秋風さむき山里の

木の下かげにたゝずみて

黄ばむ鴨脚をひろひあげ

あかきもみぢを袖にうけ

ひと葉ひと葉をながめては

ふかき思ひに沈みつゝ

あつき涙の頬にながれ

ふとき息こそ投げらるれ

ひと葉一葉にさざみたる

くすしき筆の神わざに

それ限りなきあめつちの

真理をこめし歌言葉

目に見えながらかたちなき

このうたことば解さかねて

いくその人のむかしより

命をすてゝまどひけむ

氷のやいばうちかざし

をどこは慾のものぐるひ

玉の小琴をかきなでゝ

をこめは戀のためなみだ

火焰にこがれ血に飢うる

闇の悪魔の高わらひ

花にあくがれ露に笑む

愛の女神の深きくぼ

かゝるこゝろをうたひたる  
 歌の起句のをかしきに  
 あゝその次のながき句を  
 たれに聽きてかうなづかん  
 はこりかなりし釋迦ころは  
 獨り知れるに似たれども  
 はとけと訓じ鬼と讀み  
 心とも解き法といひ  
 空ふとかたり有ふと呼び  
 實ぞとさとし假ぞと演べ

人をあざむく謔語の  
 くどくしきが憎きかな

釋迦もぬこそはさとらぬに  
 なにを達摩の九年をば  
 かもひ沈みていたつらに  
 黙してやみしあはれさよ

ひと葉一葉を拾ひあげ  
 うちながむれば今もなほ  
 くすしき筆はあめつちの  
 眞理のうたを示せるに

嗚呼かくながら讀みがたみ  
我世もあたら過ぎよとか  
なげきて立てばいつしかも  
我は落葉の下に眠れる

鏡影

(三十一年十一月作)

◎ (一) 今ぞ我手に

くろがねの小槌のしたに

くだきても珊瑚はあかし  
ぬかるみの野澤の水に  
ひたしてもはちすは白し

わが戀は珊瑚のあかく  
かはらざるさよき句ひか  
わが戀ははちすの白く  
けがれざるたかきなさけか  
世のみちに打たれしことは  
その槌のしげきといづれ  
人言にけがれしことは

ろの水のふかきといづれ

さればとて泣きてやまむは

よのつねの男なりけり

はちす葉の世に抜け出でし

われに骨われに才あり

わかものゝはやる血汐は

荒岩をしのぎて走り

わかものゝ怒る波のはは

旋風つむぎかぜを追ひて狂へり

西にゆきひがしにめぐり

劔に泣き酒にのゝしり

いろ／＼の涙のあとには

やぶれたるこの袖にあり

世の中を思へばをかし

さばかりの戀のみだれも

年ふれば夕立すぎし

一むらのよその浮雲

うれしきやけふのうつゝに

珊瑚よりすぐれし珠の

はちすより秀でし花の  
あゝ君は今予我手に

㊦ (二) うまざけ

霜にくだけしさゝん花の  
わがくちびるは色もなし  
瘦せしわが頬のつめたきを  
君がひたひにゆるせかし

ゆふべの磯の新潮しほに  
おちてすゝしき天つ星

けだかき君がまなざしに  
あゝいくとせかあくがれし

君がやさしき手のひらに  
こぼれてあつきわがなみだ  
わがおそろへしむないたに  
にほひてきよき君がはだ

あはれうれしやうまざけに  
酔ひては人のうたふごと  
あはれうれしやあをぐもに  
のりては神のあそぶごと



春のどかなるわが戀の  
花のにはひのあさぼらけ  
秋れもしろさわが戀の  
月のひかりの夕まぐれ

あゝわきもこよけふよりは  
戀にこがれし旅の袖  
君が手にとるひとすぢの  
なさけの糸につながばや

あゝわきもこよけふよりは

戀にくるひし歌の笛  
君が胸なる七つ緒の  
おもひの琴にまらべばや

虎ふす山を雪にこえ  
鱈すむ海を夜わたり  
あらくをしきあめつちを  
さぐるも君といざふたり

蘭をばかざし菊を摘み  
月をばさゝげ珠をとり  
きよくめでたきあめつちを

さぐるも君といざふたり

ふたりして飲むさかづきに

たのしき影ぞゆらぐなる

あゝただ胸のさわがれて

わがよるこびの歌もみだるゝ

明星

罵らでわれもにあらず韓山にあさ日

の御旗力なき見れば

いまははた日本男兒もたのまれず見

殺しにする我黨二人

(相知れりける安剛壽權傑鎮二人の惨刑の事ありける時)

○

たくましき七尺をそこ召に洩れて口

惜し往かれず義和團討ちに犠牲

日の本に妻子をおきて國のため犠牲

となりたる杉山書記生

國々のいくさぶねあつめ支那の子が

夢のおどろかす大砲小砲

健兒らが太沽の城の朝靄にはやく樹

てたる日の大御旗

○

酔ひざめの我におくると星を出でて

羽衣をうしほに濡ちて神ふたり珊瑚  
の鳴に珊瑚とり暮すに蛇一つ白きを  
山百合の花をまねに  
だきて巖にぬる神

○あたらしき歌のすがたを聞きたる子  
の信綱を嬉しと思さん(名々木弘綱翁の十年祭)

○はぢらひて湯槽を出づる妹のごと水  
に影さす白あやめの花

君ゆるゑに瘦せたるわれと告げもせば  
相見るをだに母はとがめん  
世のかぎりふところにして泣きぬべ  
き文をもせめてたまへとぞ思ふ  
うつり香の去らぬ思へば古裕ふるあゆまむかし  
の人の憎くしもあらず  
いくたびも染めて見つれど紅くわなるは我に  
ふさはず色あせにけり  
君が頬とわが頬とふれてつきしいき  
芙蓉の風のゆらぐと思ひし  
○懐ふことあるをば言はで山に入り秋

の日摘みぬ巖に生ふる蘭  
山百合の花つみためて花ごとに人の  
名書きて瀧に流す日

○ 近江より玉繭買ひにこし人もまじり  
て踊る秋の夜の月  
いもうとにわざと君が手つながせて  
踊るこよひの胸さわぐかな

○ たろがれぬ家鴨は罌をめぐりけりわ  
れは家なし三十男

たけをらを南の支那にやりしかど甲  
斐なや終に劉坤一立たず  
男手に袷衣の破れひとり縫ひて南の  
支那に秋の雲見る

○ くちわろき今の劉郎京に入りて先づ  
罵るは何の博士ぞ  
夕だちの雲にのりきて人の子に歸さ  
忘れし大町桂月

○ 刺しちがへ死なんといひし我文のい  
らへはせず唯よろに譏る

○ 父死にて早も三とせを中の子は負債  
かさねて猶たはれ歌  
いま一つのこれるきぬを酒に代へて  
賣れとは鬼か否二世の夫

○ 西へ移る星の一つを見つるかな葡萄  
かれがれ栗鼠なく夕

○ 濱寺は又あんところ雁月は又あはん  
友さきくあれさらば  
小屋ごとに豆の花這はせ牛飼ひてひ

ろき牧野に聖書よまん願ひ(春雨)  
君が詩を高く誰すれば神の世を逐は  
れ出でたる君も一人か(鳥庵)  
やせやせて雄心をどる君がうた素帛  
を裂きて血に染めて見む(夕庵)  
鐘に這ふ白き小蛇を見つるより酒骨  
が歌は蛇の氣の多き  
濱寺に合宿りしてひける風ろれよ酒  
骨がねざうわろきに  
○ 火を踏みて入りなむ後に我歌の焚け  
ずしあらば君ころなほせ

○ 五百里をはるばる上り京の市に買ひし玉琴道に碎けぬ  
あたらしき琴の手しらん少女子を十とせ尋ねて歌は舊りにけり

○ 君が名を石につけむはかしこさにし  
ばし芙蓉と呼びて見るかな(瀧寺に拾ひける石の名を登子トコの芙蓉とつけければ)  
やさぶみに添へたる紅べにのひと花も花  
と思はず唯君と思ふ  
蓮はすきりてよきかと君がもの問ひし月

夜の歌をまた詠よしてみる(以上二首登子へ返す)

○ つぶやきて君が手ふれし夕よりくし  
き響の鐘に起りぬ

○ おろろしき夜又のすがたになるもの  
かこゝろあざみくはへてふりかへる時  
小扇こあふぎにならべて書ける我れの名のあ  
まりにやさし細筆ほこなれば  
なぐざめの君が玉手によるべくばよ  
ろづの征ゆき矢もほほゑみて受けむ  
くれなるの袖口かみてほほゑみて千

とせ祈るは世の常の戀  
 秀でたる歌よめといふ戀ならばわれ  
 は命いのちをかけずしもあらむ  
 あらず君ただ世の常の夢ならば松の  
 風にもまぎれはつへし  
 つよき心といへど伏日ふしめがちにお  
 くれ毛ゆらく嗚呼君もとめ  
 あめつちの神のねたみに奪はれん二  
 人が歌ぞ絹に上すな  
 星の子のふたり別れて千とせへてた  
 またま逢へる今日にやはあらぬ  
 後の世も君と抱きて地に泣かんあま

りに清し星の世の戀

○ 荒海に千とせ沈みし鐵の矛人やぶことあら  
 はれて我れの歌あり  
 くろ雲を火ほの焰ほに焼きて魔の手より人  
 の子かへす神わざの歌  
 わが歌の一つ缺けなば空にてもくし  
 き光の星一つ消くむ

○ 君なくば星の數にも成らん身の口紅  
 さすよ芙蓉かざすよ  
 京きやうの紅べには君にふさはず我が噛みし小

指ゆびの血をばいざ口にせよ(晶子の許へ)

妻つまが名なはこの七なな村むらに唄うたはれて男おとこ名なは  
なし十じゅうとせ草くさ蒔まる

秋あきかせに破やぶ裂れつ彈だんもち二人ふたりして入江いりえの

水みづに投なげて己おのれみしか

相あ逢いはば翡ひ翠すいに問とへよわが植うゑし芽め  
ばへの芙蓉ふよう何なにの色いろに咲さく(以上 首安靈沫へ)

○

扇あふぎかみし人ひとのねもかけ  
きけな君きみとばかりいひて涙なみだぐみて小

磯いそに立つ一人ひとりは聲こゑのうつくしきそれ  
よその人ひとうすき月夜つきよに

○

芙蓉ふようとをもとめどならばなづくべし  
汝ななはをのこそ古ふる書しよに據よらむ(子の名を萃とつ

けて)

口くちなれぬわが守も唄うたにすやすやと眠ねる  
見みあはれ親おやどたのむか  
秋あきかせに悲かなし見みをすかす唄うた  
まりに悲かなし見みをすかす唄うた我われながらあ

わが見みたる秋あきの御み神かみは男おとこ神かみなりもみ



ぢかざしてちま小き太刀佩びく

○ 鐵南はふるき千とせの戀なるを男をとこに

したる神のたはぶれ

二日酔のかしら痛きをさもなげにか

わい成なる美が書かのこと語る

○ ひんがしに愚かなる國ひとつありい

くさに勝ちて侮りうけぬ

大君の御民を死ににやる世なり他人

のひきゐるい擔架かのうへに子は笑みぬ

創てを負ひてかのうへに子は笑みぬ

鳴呼わざはひや人を殺す道

○ おく霜をはらへばのころくれなるの

血しほ手に染む山砲野砲

奪ひねる敵砲五十更まにすゑて大野ま

もれば雪高まう降る

○ 一たびは北京ぺきんを攻めし前の夜におも

ひすてたる戀にやはあらぬ

もゆる火も二人踏まんと思はずば君  
が笑顔をただ酒に見む

○ 天龍のいたづら法師ひとことのいと

まも云はでいづち往にけむ  
逢ひながらこのかたくなの額髪ひたひがみをしやう和尙

も打たず我も問はざりき(峨山老師をいたむ)

○ 世の歌をあざわらひしはきのふなり

今は戀さへ君とわが手に  
あめつちは狭きも何か白馬はくば飲みて酔

ひ泣く歌を許さば足らむ(文士優遇論者に興ふ)

○ 木がらしに笛ふく神の御子ふたりつた葛  
のもみぢをたぐりて消えぬ

○ 馬を下りて酒のあたひを問ふなかれ  
この西部利亞に老いん二人ぞ

○ 夕川の蘆ちる水にこゑなくてさらに  
西する雁を見しかな

○ 尼君と姫がうへ呼びて今日よりは文  
箱はこのふさも眞白うなりぬ

名をのらぬ男神戸に立ち弓矢もち何  
ぞや我ため歌庫まもる

○  
ねもへきみ霜をおぼゆる秋かせに蘇  
士をこけて更に西する

○  
鐵幹が旅する錢にこどかきて心にも  
あらぬ唱歌集賣る

○  
國々の旗手のなかに日の御旗まじる  
を見れば雄たけびせらる  
わかき子の王となのりて國ひとつ開

く夢みぬ黄河の南

血に染みし軍の旗につゝまれて佐世

保へかへる君がなきがら

敵中に馬をどらせて首七つ斬りし君

が名世をおどろかす

関のこゑ城をゆすると見てあればま

たも揚れり日の大御旗

鋸に似たる血がたな天地にとどめて

死なば悔ゆることもあらじ

明日知らぬ命すくへと書けるふみ日

附は二日今日十五  
國々の大砲小砲うちなめてわづか四

ト里すすみかねたる  
 御軍はつひにきたらす城の火に女鬼  
 男鬼の相抱き泣く  
 手さぐりに血に染む女鬼火にやけし  
 男鬼いだきて城に泣く夢  
 日の丸のあかき小旗を襟に縫ひ支那  
 の子あまた糧たてまつる  
 天津の大城戸あけし鬼わざは露西亞  
 にもあらず獨逸にもあらず  
 城の戸に綿火薬かけてれどろかず  
 寸すりし子は鷹森寅吉  
 日の本のさくらをとこは佛蘭西の蓄

薇の優男と銃なめて打つ

○ 神風の五十鈴の河に髪あらひ歌よみ  
 し子を見んよしもなし(栗本政子を悼つて)

まの歌の佐渡につかん日海鳴りて夕  
 立すべしいかづちが家(柄澤いちづち君に詠草を返す時)

こゝろざし歌にあひたるわが友は越  
 後に一人大矢正修

うれしきは越後の山のまら雪を口に  
 ふくみて君がよめる歌(以上三首大矢正修君は訪はれて)

吾妹子にわが歌かかせ雨の夜に消に  
たる香を又つぎにけり(正修君の篆閣に題す)

○

釋迦いにてこゝに三千載釋迦の子は  
釋迦の屍を食ひものにする

もろ人に狗のかばねを拜まする大詐

爲漢の大谷光瑩

大きな京の見世小屋釋迦牟尼のか

ばね見すると錢とる法師

○

わが戀を人にゆづりて鎌倉の禪師が  
許に飯たく男

都にてねがふところもわりしかど松  
葉が谷に雨の音きく

### 小鬟紅釵

(さる人共によめ)

われ

秋かぜに胸いたき子は一人ならず百  
二十里を今おとづれん

さる人

なにをまづたづねまつらむろれよ君  
みやこの姫はまさきくますや  
われ

うれしくわれらはいまだ人の子なり相見ることよひ星もながれず

さる人

戀のほかに見るめものなき歌の子に人の道とく何のたはぶれ

われ

戀と名といづれおもきをまよひ初めぬ我年ここに二十八の秋

さる人

たかきのぞみもちしはきのふ人の日記に我歌ひとつのこらば足らむ

われ

手をあげて百のヤルクを罵らむそのとき人に白髪生ひざれ

さる人

神も呼ばじ今はながる大川の水にまかせむさもあらばあれ

われ

あめつちに二人がくしき才もちてあへるを何か戀をいとはむ

さる人

のがれがたきえにしと君よゆるさせな鬼神來とも御袖放たじ

われ

ほほゑみて火をもふむべき二人なり  
神もたのむな世の人なみに

さる人

君にろひてのちの後まで文の上にか  
かんはあまりふさはぬ我名

○

地におちて大學に入らず聖書よまざ  
世ゆゑ戀ゆゑうらぶれし男

# 鐵幹子 完

明治三十八年七月一日印刷  
明治三十八年七月六日發行

正價 金三十拾錢

著者 與謝野鐵幹

發行者 大阪市南區鹽町四丁目二百十一番邸  
矢島嘉平次

印刷者 大阪市南區鹽町四丁目百五十一番邸  
礪波伊三郎

不許複製

大阪市南區心齋橋通り鹽町北へ入

發行所 矢島誠進堂書店







